

二里に及べり。眺望はとりわけて奇絶にはあらねど、水石相闘ふの偉観は、銚子の近傍この犬若崎を第一とす。否、關東第一也。

岸上より沖波に俯せば、目眩し、心慄き、壯快きはまりて、覺えず悽愴の感起る。ひごろ好めるシルレルが『ダウヘル』の詩を誦するに、われも詩中の人となれる心地す。

山上の眺望

だら／＼垂るゝ汗を拭ひもあへず、一步一喘、岩根を踏み、羊腸の嶮をたどりて、漸く山頂に達して、脚下に千山萬岳の朝するを見下したる時の心持は、何にか譬へむ。

日本の高山中、眼界の最もひろきは、越中の立山也。山高きが故に、必しき眺望よからず、一町ばかりの高さにも、眺望のよき處あり。志摩の日和山、出雲の島根半島の鷹尾山、羽後の雄鹿半島の寒風山、松島の宮戸島の大高森。

東京附近にては、上總の鹿野山也。東京より木更津まで蒸気船あり。木更津より山頂まで、四里餘り、人力車を通ず。山頂に、旅館あり。旅館の縁先より、東京灣をへだてて、關八州の山野を見下す。後には九十九谷とて、上總安房間の山々谷々を見下す。關東第一の眺望也。

峠の茶屋

夏の熱き日、山坂をのぼりて峠の茶屋に清水を飲みたる人にして、人間の涼味と

いふことを解すべし。また水の味を解すべし。

峠とは、山路の登りつくしたる處をいふ。山の頂とは、必しも同じからず。頂とは、山の最も高き處をいへど、人は成るべく越ゆるに樂な處をとて、低い處をねらうて路をつける故、峠は多く頂より低い處にあり。

支那には、この意味をあらはす文字なし。峠とは、日本にて作りたる面白き字也。而して日本の峠は、何といふ意味かといふに、手向といふこと也。「たむけ」が音便にて、「たうけ」となりたる也。「懐しく」が「懐しう」となり「讀みて」が「讀うで」となるも、これに同じ。手向とは、神佛に幣帛などをさぐることにて、むかしは、山坂の登りつめたる處を通れば、幣帛とて、小さく切れる布帛をまき散して山の神にささげたるもの也。菅公の歌に「この旅は幣帛も取敢ず手向山紅葉の錦神のまのこく」

とあり。峠にて、神様にまきちらす幣帛を忘れて來りしが、ちやうど幸ひ、紅葉が散りて錦のきれのやうに見ゆるから、これを幣帛ともおほしめして受けられよとの意にて、一向下らぬ歌なれど、峠の意味はこれにてよくわかる也。即ち山路の登りつめたる處にて、山の神に幣帛をたむけし故、そこを「たむけ」と云ひ、終に峠となりたる也。

何處にても峠の茶屋には、名物の力餅を賣るが常也。餅食ひて力をつけるとの意味なるべし。名物にうまいものなしとは、實際の話なれど、山坂をのほり來りて、誰も腹が減つて居れば、力餅大に味あるを覺ゆる也。

われ、嘗て峠の茶屋といふ題にて、俗語の出來ぞこなひみたやうな新體詩をつくりたることあり、馬子などの心をよみたるつもり也。

今日も休もか、峠の茶屋で。
茶屋につめた水が湧く。
風がすどしい。娘がござる。
娘十七、名はお花。
につと笑うて、愛相を添へて、
かはいやむすめ、餅を賣る。

上州の山水

上州の國の形を譬ふれば、鳥の飛ぶか如し。岩代と下野とに界する尾瀬峠あたりが、右翼の端にして、武蔵と信濃とに界する三國山が、左翼の端也。草津その頭に當り、淺間山、その口に當る。館林附近は、その尾也。

關八州の中にて、骨を露はせるは、上州の山也。妙義山、之を代表す。妙義の三山、すべてこれ大なる巖也。吾妻川を溯れば、岩井堂、岩櫃山、丸山いづれも骨をあらはさざるは無し。榛名山も榛名祠附近に骨を露はす。圓満莊重なる赤城山も、不動瀧あたりに骨をあらはす。

淺間、白根、赤城、榛名、妙義、上州の名山は、みな火山也。従つて温泉多し。伊香保、草津、鹿澤、四萬、川原湯、澤渡、川中など、その最も名あるもの也。冷泉には磯部、長岡、鏡塚、淨法寺、みな平地に在り。

上州の川は、みな利根川に入る。利根の水源は、利根郡の利根嶽に在り。片品、吾妻、烏、碓氷、蕪、神流、渡良瀬諸川をあはす。神流川には、三巴石の奇あり。渡良瀬川には、高津戸の急流あり。大間間驛をさる一里、桐生驛をさる一里半、羽

根瀧と連りて奇觀也。吾妻川は、上州耶馬溪の稱あり。片品川には、追貝の吹割瀧あり。その奇、關東無双也。瀑は、利根郡の圓覺瀑を上州第一とす。榛名山の船尾瀑之に次ぐ。

館林の躑躅は、關東第一也。一帯の丘陵城沼に臨みて、眺望もよし。東京より汽車の便あり。この附近、太田の金山は、新田氏の城址、新田神社に新田義貞を祀り、高山神社に高山彦九郎を祀る。當年の志士、彦九郎は上州の産也。大光院は、名僧香龍の開基に係る。香龍様として、有名なる大刹也。

紅葉は、碓氷、妙義、交通の便の爲に最もあらはる。されど、秩父の奥に入らば、更に壯觀也。赤城の西面、北面よりかけて、片品川を溯らば、猶一層壯觀也。

妙義、榛名、赤城は、上州の三名山と稱せらる。山の湖は、赤城の大沼、榛名の

伊香保沼、草津附近の野反池、大きさも、ほど相同じ。岩代との界には、尾瀬沼あり。以上の三湖よりも、やゝ大也。

多胡の碑、山上の碑、金井澤の碑を上州の三碑と稱す。多胡の碑は、多野郡吉井町字池村に在り。山上の碑は、同郡八幡村字山名に在り。金井澤の碑も、同所に在り。多胡の碑は、下野の國造の碑、陸前の多賀城の碑と共に、日本三古碑と稱せらる。いづれも、古きを珍しがらるゝ也。

白根山の一夜

湯本を出でたち、白根山へとて、荒漠無人の境をたどる。三里の山程、或は谷を踰え、或は阻を攀づるに、蛇の如き細徑忽ち断え、忽ち續きて、いと覺束なき路也。

名もしらぬ怪鳥の聲をききつゝ、からうじて路をもとめて、漸く前白根の巖によれば、奥白根なほ高く突兀として立てり。その間に一池あり、五色湖といふ。その色靑藍、藍よりも濃く、水としもおもはれず。こは昔の噴火口に水たまりしもの也。

この山、いまもなほ時々噴火す。四十年前にも噴火せりとときく。葉はなくて、大枝のみ残れる樹木、幾百千株となく、枯れたるまゝにて、池畔の凹處を圍みてたてるさま、さながら鹿角の散在せるが如し。四五年前噴火の時、熱灰を被りて、かくは枯れたるものなるべし。奥白根は、群嶽糾紛たる上に孤立せる山にして、その麓既に雲上にあり。高さは二三十町ばかりにして、全山肉なく、一木なく、巨石礫石として勢飛ばむとす。人は巖角を躡みて雲と共に登る。山の巔に、小龕あり。大己貴命をいつきまつれり。足を返して、舊路を取りて下る。湯本の旗亭に至り、快く午

睡に就き、さめてまた起ちて中禪寺に來りしほど、日は已に暮れたり。明日より山開きして、禪頂を許せば、數千人の信者來りつどひて、いとにぎはし。からん

翠曉。善男の禪頂するにさきだちて、神體を奉じて男體山上の小祠に安置せむとて、二荒山の神社の祠官の燭を執りて、夜十時よりいでたちて、湖上に屹立せる男體山の二三里ばかりなる峻岳をよづるに、我もともに上りぬ。闇の夜なれば、數歩の外はあやめもわかず。登音木魂にひびきていと物凄く、いよく登るに従ひて、山いよ／＼峻しく、ところ／＼鐵索を援きて、からうじて摧鬼を攀ち登るに、獵々とし樹を捲く山風、肌にしみて嚴冬よりも寒きに、著たるは唯單衣一枚のみなれば、滿身粟を生じ、齒牙自から寒戦せり。

かくて、山頂にのほりて、神體を小龕の中に安置したるのち、側の小屋の中に入

りて火を起して暖をとり、祠官と相對して語るほどに、東天やう／＼白むとすれば、はや六根清淨と唱ふる聲、遙に山の麓にきこえて、白衣の信男の登り來れるさま也。日出を見むと思ひて、幾回か戸外に出でて眸を放ちたれど、空曇りたれば、これを見るによしなくして、夜は全く明けにけり。

見下せば、脚底に朝する群蟻、蟻垤よりも小に、廣しと思ひし中禪寺湖も鞭漑に異ならず。逶迤として流れゆく大谷川の水も、さながら一條の銀蛇のごとく、心澄み、氣昂りて、天下を小にするの概あり。

かゝるほどに、六根清淨の聲益々近づきて、幾百千の信男遂に山頂に充滿するに至りしかば、祠官にわかれをつけて、昨夜とは路をかへ、獨り裏道を取りて下る。谷深くして、日光をとほさず、たび／＼溪間に出でて徑の絶えたるに遭ひ、人は流

水と路を争ひて愈々下れば谷愈々深く、宵々として奈落の底に墜つるかとおぼゆるに、浮世の春に後れて轉りかはす流鶯の聲うるはしく、獨往の客をなぐさめ顔なるもいとあはれ也。下り／＼して、遂に男體山と大眞子山との間なる志津といふ處に出でぬ。これよりなほ慈觀、初音、日月、裏見諸瀑のかゝれる一筋の溪流に沿ひて、日光に下る、山路四里にして近し。

天梯曉倚玉孱顔。獨對白雲心自閑。
一笑神仙緣未了。又隨流水下人間。

溪流の奇觀

木曾の寢覺の床、陸中の五串、激しくして奇也。紀州の瀨八町、靜まりて奇也。

まだ世間にはひろく知られざれど、石見の斷魚溪、底一枚の石、幅數十間、一さ五
六間に互り、平かにして千疊敷となり、聳え起りて、駒の頭となり、襖が淵となり、
水は藍を流して、川床よりも下を飛び、躍り、跳ね、走り、徐行す。この奇観は、
寫真には取れず。山陰の僻地にありて、往いて見る人すくなし。惜むべき哉。

急流の偉觀

肥後の球摩川、駿河の富士川、羽後の最上川、日本の三急流と稱せらる。千里の
江陵、一日に還つて、水走り山飛び、水の激するさま、岩のたてる様、奇怪を極む
舟にて下るに、恐しき心地すれど、痛快也。

丹波の保津川、信濃遠江の天龍川、信濃美濃の木曾川、いづれも急流、舟にて下

るべし。

白帆の美

日本の川や海に、一種の美を添ふるものは、白帆也。品川灣頭、白帆充ちて白鷗
のむらがるに似たる汽船の煙は、折角の美景を悪了す。

水天彷彿の間、一帆、天をつんざいて來れる荒川、利根川など、平原の中に之の
字の形をなし、川は桑麻の中に没すれども、白帆一々川の來路を示せる、美觀なる哉。

行々子

朝食して、宿を立ち出づ。この日、ひねもす鯉漁をなさむとする也。

舟は都合五艘、中二艘を結びつけて、我等一同うち乗り、今一艘には、酒肴の具を載せて、料理人控へたり。他の二艘は、即ち眞の漁舟にて、漁夫二人づゝ乗れり。かくて、網をうちつゝ、下流に向つて下る。流山の町をはなるれば、兩岸はみな蘆荻、行々子相和して啼く。

半里餘りも下りたれど、未だ鯉を獲ず。一里ばかり下りたる處にて、はじめ一尾の大鯉を獲たり。長さ二尺ばかり。料理人、左手に潑刺たる鯉を握り、右手に快刀をとりて、一たび揮へば、忽ち頭尾處を異にす。切りはなせる鯉の頭を俎上に立つれば、なほ口を動かす。身を切りて、あらひとなせば、肉なほ躍る。

一尾の鯉、直にあらひとなり、煮肴となりて、盤に上りて、十二人食するに餘りあり。あらひの皿に、蘆の葉を折りてあしらひたるも、いと心ききたり。

溶々たる小利根の中流、行々子の聲を聞きつつ、この鮮魚を食ひ、美酒を飲む。

松の下陰

裸體にて暫し走りし配達のやがて居睡る松の木陰に

蟬故に憎める人よ尋ね來てこの松陰に涼みとらなむ

くやしくも君とは知らで待たせけり例の水鶏と空に聞きつつ

山川に河鹿の聲を聞きそめて歌の仲間と思ひけるかな

竹葉のそよぎ

むしあつき夏の夕、すゞみ臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團樂すれば、竹

葉そよぎて、涼氣自から盤上に逆る。
ひとはちの飯、母とわかち、妻子とわかち、庭の鶏と分ち、池の鯉とわかち也。
いまひとつ一匹の犬、いつも食事を違へず、來りてかしこまる。これ近鄰の家の
飼へるもの也。

電 光

八月二十二日。

墨を流せる空に、電光をりりきらめき、風すどしきに聲して、冷氣、面をはらふ。
沓掛より右折すれば、足先やうやく仰ぐ。輕井澤は、はや離山にへだりて、四
面また人籟なく、追分の燈火も山外にしづみぬ。

雷光收まり、陰雲とけのきて、星辰漸くおほし。仰けば、淺間山、頭を壓して聳
え、噴煙天にたなびきて、巨人の息するが如し。

御嶽の涼月

淋漓たる汗を靈泉に洗ひ去りて、われ獨り樓上に坐す。樓は山腹に倚りて、勢
飛ばんとす。眼下には、神流川溶々として流れ、川の彼方には、數町の田をあまし
て、御嶽の連山、逶迤として横はる。

連山のつくる處は、曠原遠く辟け、そのはてには赤城日光の山々、白雲の中に隠
見す。目さむる眺め也。

やがて、わが居る山の影、夕日にながく川のかなたまで及ぶばかりとなりぬ。大

鵬の如き黒雲、御嶽の一角を壓して現はれしが忽ち一天に瀰漫して、こなたに向つて走るほどに、白雨はやくも珠を躍らし、風に隨ひ、亂れてわれを撲つ。

見渡すかぎり、恰も一幅の墨繪の如く、三伏のあつさも、この一雨に洗はれて、萬斛の涼味、乾坤に溢る。

雨は、やうく我に遠ざかりて、軒より直下する點滴、水晶簾を下して、雨の名残をとどめ、空は早くも瑠璃をみがきて、一痕の涼月、御嶽の上にさやか也。

北秋川の上流

多摩川の上流に出でむとて、朝日を肩にして、山奥深くわけ入る。左右みな山也。山と山、相迫りて、その間たゞ一條の北秋川を餘すのみにて、毫も平地なく、家

をたつる餘地だになければ、勾配いと急なる麥畑、山の上かけて開けて、その上に往々茅屋を見る。畑のひらけざる處には、立ちのほる畑に、炭がまのありか自からあらはれて、この山間のなりはひも、それと知られつ。

川の流は小に、岸低く、路は直に川身にそひ、水と共に萬山の底を縫ひて、斗折蛇行す。さながら二重にたてまはしたる屏風の中を行くがごとし。

回顧すれば、山かさなり、ゆくてにも層嶺面に當りて、路竟にきはまるかと思はれしも幾度といふことを知らず。『山重水複疑無路。柳暗花明又一村』とうたひけむ陸放翁の詩句、今更に靈活なるを覺ゆ。

悠々自適

角筥に住みし頃は、三兒ありき。大久保にて一兒を失ひたるが、今はなほ四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女なり。

われ、性、植物を好み、動物を好むこと更に甚し。花美なれども、久しく之に對すれば變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。

されど、四兒をもちたつる手のかゝるを以て、妄りに多く動物を飼はず。鶏を飼ひしが、犬常に來りて襲ひ、その一つ終に犬に奪はれしより、かあいさうに思ひて、飼ふことをやめぬ。

小池を掘りて、鯉、金魚を飼ふ。われ、執筆にうみて、庭に出づる時は、先づ必ず之に對す。その泳ぐさま、何となく趣味あり。されど、それを見て喜ぶ小兒のさまを見れば、なほ一層の趣味を感ず。

此處にうつり住みしより二三箇月の間は、たゞ庭園を逍遙することが面白かりしも、なれては初めのやうにはめづらしう思はず。小兒をつれてゆけば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒のために、蟬を捕へたり。栗を拾ひたり。また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙、常に愉快なるを覺ゆ。

霞が浦の風光

長汀曲浦、煙靄縹緲として、いつ見てもあかぬは、霞が浦の風光なる哉。

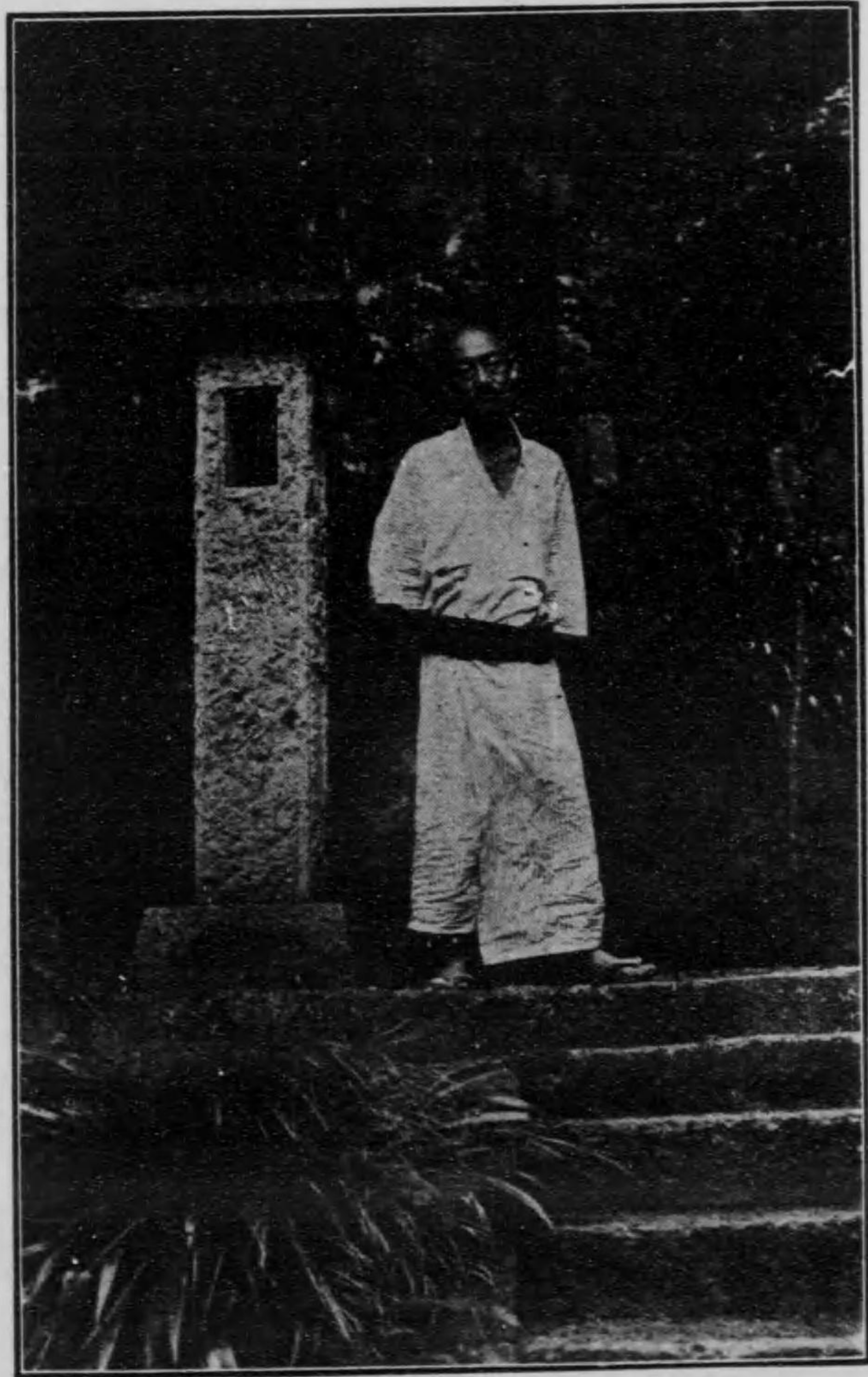
この湖、常陸の信太、河内、新治、行方の四郡及び下總の香取郡に跨り、周回三十六里、首部は新治郡の一端を挟んで燕尾の形をなし、末は北利根川となり、北浦と合して浪逆浦となり、終に大利根川と合す。

十六島とは、霞が浦を西にし、浪逆浦を東にし、大利根を南にし、北利根を北に
せる一帯幾萬頃の平地にして、水陸縦横に通ず。香取の祠後、櫻の馬場の丘上より
眺むれば、この十六島は眼下に在り。

十六島を隔てて、潮來の稻荷山と相對す。鹿島の御笠山は、やゝ遠くして、右に
當れり。この丘より、十四五町北にゆけば、大利根に出づ。川にそへる一簇の人家
を津の宮といふ。水涓に大鳥居立てり。鳥居の傍、水に臨みて、一の旅館あり。村
田屋とて、佐原にもなき程の宿屋なりとか。

六月のなかば、雨漸く止んで、雲慘憺たる夕、ここに宿りぬ。

妙義の三山



妙義の三山は、絶頂までも樹木あり。岩も樹木を帯びたり多くは落葉樹なるが、まれには松を見る。ここにて見たる紅葉もよし。されど紅葉の美は、白雲の大字巖附近には如かざるなり。

ここにてても、なほ巖を説かざるべからず。眼界は、東山よりもひろし。金洞の主峰に面して、左より數ふれば、西大黒岩、葛籬岩、仙人岩。右に轉すれば、八丈岩、大佛岩、鳥越岩、二見岩、東大黒岩など、名のついたものなるが、名のつかぬ奇巖も亦多し。妙義山中無數の奇巖、強ひて形似を求めて名をつけたるが、おほかたは、でたらめ也。

記する可也。記せざるも可也。たゞ白雲の大字巖、金鶏の筆頭岩、金洞の四門、天狗臺、朝日嶽は、忘れむとするも、忘るゝ能はざる也。

曉の蓮花

一泓の池水、半ばこれ蓮花。白や紅や影を水におとして、水に花あり。
健鯉、時に躍りて波文、岸に及ぶ。
水樹深く鎖して、人籟なし。曉烟垂柳を罩めて、日未だ昇らず。

夜の高瀬船

四五十石も積まるべき高瀬船。十人餘り乗りたればとて、乗りたるやうにも見え
ず、涼風面を吹いて、快き言はむ方なし。
空はくもりて、薄墨をながしたらむが如し。東天稍あかるきは、月出でむとする

にや。

船を中流に浮べて、五六町さかのほる。流山の人家、一帯の黑影となりて、二三
の燈火、闇を破る。波靜なる水面、時に大魚躍りて聲あり。

船中には、一同思ひくの處に、座を占めて、話聲、吟聲、闇の中に相和して高し。

山間の夏の月

月は、四時共に佳也。春のおほろ月、花林を照らすもよく、秋の澄みたる月、尾
花の末に出づるもよし。冬の小さくして高き月、寒光を放つて白雲と映對するも亦惡
しからず。

されど、余は最も山間の夏の月を愛す。浮世の蚊も炎熱もなき處、四面蒼々たる

中に清涼したるばかりの月に對すれば、嬉しきが如くまた悲しきが如く、一種の情味胸に充ちて快いふべからず。

色彩の大觀

色彩の中に、余は黄色を好まず。山吹の花、黄菊の色、さては黄金の色など、多少輕薄の氣あり。

赤色は、俗氣あり。紫は、いやみあり。青き色にこそ、最も詩趣あれ。空の色、海の色、若葉の色、多少異なる所あれども、概して青色なり。余が山間の月を愛するは、畢竟するに青色を愛するが故也。

色彩の大觀は、日出日没の際の雲に盡きたり。然もこれ都會の地に於て見るを得

ず。高山の頂か、海濱に於てせざるべからず。

日光斜に雲を射、雲變動して、光彩陸離、到底人の手にては畫くべからざる自然の大丹青也。日光の美は、雲と相待つ。また宇宙の一大美術たらずんばあらず。

夏の蟲

飛んで火に入る夏の蟲、

君よ、おろかとおざけるか。

火に入らずとも、思へ君、

蟲の命はいくばくぞ。

草葉のかけにひそむとも、

秋には死ぬる身ならずや。

熱火に命うしなふも、

露によわるも、死はひとつ。

ひと夏わづか九十日、

よしや安けくすごすとも、

さめてはかなき一炊の、

夢のうき世は如何にせむ。

いのち長きも、みじかきも、

死ぬるいまはにかへりみば、

いづれが夢にあらざらむ、

夢ながくとも何かせむ。

ゆくもとまるも思ふまゝ、

思ふまゝなることをして、

死なば甘心せざらむや、

熱火によしやたゞるとも。

幾度か人に追はるれど、

とほさで止まぬ初一念。

けなけならずや、火を追ひて、

死を恐れざる夏の蟲。

勇ましい哉、夏の蟲、

のぞみの光り仰ぎつつ、

身をともしびに躍らせて、

未練もいはず、悔いもせず。

關東の花木

山は必ずしも高きを尊ばず、樹あるを尊ぶと云へり。關東は人口稠密、材木薪炭の需要は到る處に山を裸にせむとす。

東京より東海道をとるも、中山道をとるも、甲州街道をとるも、奥州街道をとるも、奥州濱街道をとるも、見わたす山々、樹は茂つて居らず。獨り筑波山は表口の一面、一山全く常磐木に蔽はる。これ神領にして、斧斤入らざる由る也。「雪は申さずまづ紫の筑波山」と、嵐雪は詠ぜり。その筑波山の紫は、満山の常磐木より生ず。筑波の翠黛は、東京よりながむるを得べし。

なほ山は小なれども、大磯に近き高麗山も、一山蒼樹を帯びたり。これも神領なればにや。日光街道の杉の並木、長さ十里に及ぶ。關東の一大壯觀也。三峰神社の賽路一里の山坂、檜杉連れるも壯觀也。大宮の氷川神社も、松杉の並木、幾ど半里に及ぶ。

東京附近には、樺多し。府中の大國魂神社は、大樺の並木、五町に及ぶ。樺の並木にては、ここが最も壯觀也。

梅の最も多きは、武蔵西多摩郡の吉野村也。杉田、常磐公園、小田原の小峯など、杵の名所多し。老幹榉の趣は、東京龜井戸の臥龍梅を第一とすべし。

桃は、越ヶ谷、市川などあれど、野田八村が最も壯觀也。

櫻は、武蔵の小金井、常陸の櫻川が關東に於ける二大壯觀也。向島、荒川土手、

飛鳥山など、櫻の名所多けれど、山櫻ならずして、吉野櫻なるは見劣る心地す。
躑躅は、館林公園。藤は、牛島。紅葉は鹽原。日光、碓氷、妙義、秩父、箱根、
交通の便なるがために有名也。

日光の自然美

結構をつくせりといふ東照宮も、さすがに目に慣れてはまた珍らしからず。二十
三字の殿堂、縹緲として書けるがごとく、丹青の美、彫刻の妙、また世に類なきも
のから、規模小にして徒に纖巧綺縟に陥り、またく雄大莊麗の風韻を見ず。島國の
美術はかゝるものによ。

含滿の淵、大日堂、日光公園、清瀧、白糸瀧、素麵瀧の如きも、また盆池の小景

に過ぎず。中禪寺湖上の月に扁舟を浮べ、去つて湯湖の畔の温泉に俗船を洗ふも、

また尋常の遊蹤なるべし。

日光の勝もと區々たる人工の祠廟にあらずして、自然の大觀なる山と水とに在り。
男體、女貌、赤薙、二子、太郎の山々、鬱勃巍立して、積翠を天外に横たへ、終に
白根山に至つて最もその高峻を極め、雲烟浮動して、萬千の氣象、得て端倪すべか
らず。山をめぐる湖水の數四十八、飛瀑の多きこと七十に下らず。雲表に巖峯たる
奥白根の麓に瀦せる五色湖の、靑靛として大空と相映發する様、既に奇絶なり。

これより二里あまりなる前白根の嶮を下れば、群嶺の環壁環合する山ふところにて、
周廻一里ばかりなる湯の湖、一泓の明鏡を開きて倒に山影を蘸し、湖水一落して湯
瀧となり、四五十丈ばかりなる巖壁の斜に欹てるが上を飛舞奔騰して下るさま、い

と雄壯也。その流戰場が原を過ぎ、地獄窟の邊りに至りて、再び激して龍頭瀑となり、水勢盤旋して百龍巖を囀む。愈々下りて中禪寺湖となり、周廻五里にして遠く淼漫澆漾、青嶂逶迤として、款乃聲裡白帆の浮ぶを望むなど、山上の景と覺えず。

この湖水の末また一決して華嚴瀑となり、峭壁の下に直下すること數百仞、鞆鞆、澎湃、巖怒り、水吼え、山岳も動かむとするばかりにて、まことに天地の壯觀をきはむ。この末流を大谷川といふ。男體山と大眞子山との間より滴る清水の末、一たび懸りて慈觀瀑となり、二たび懸りて初音瀧となり、三たび懸りて日月瀧となり、日月瀧の下數十弓にして、四たび懸りて裏見瀧となりて、含滿の澗の上にて、この大谷川と會す。なほ雄壯なる羽黒瀧、幽峭なる相生瀧、轉折多趣なる布引瀧などの末流も、これと合し、赤薙山の絶壁より懸垂せる七瀧の末の稻荷川も、神橋のほと

りにて、これに入り、胎内、霧降、滑川三瀑のかゝれる一筋の流の末も、これに加はりて、終に鬼怒川に注ぐ。水は清冽に、地は爽壇に、風景蒼々として水煙の縹緲たる處、夏なほ冷かなるを覺ゆ。

水自潺湲山自幽。吟筇得々儘閑遊。
日光七十二飛瀑。到處懸崖別有秋。

霧降瀧

霧降瀧は、華嚴瀧、湯瀧につぎての大瀑なるが、上下二段にわかれて、その間相距ること數百步、望瀧臺より望めば、二瀑ともに谷を隔てたる翠崖綠樹の間に全豹を露はして、一條の蛟龍の雲際に天橋たるが如く見ゆれども、峻坂を下りて瀧壺に

就けば、上瀑は見えず。下瀑の巖壁、赭色を帯びて、毫も稜角なく、流水たゞ壁に粘附して、徐々として下るのみにて、更に壯快の觀なければ、上瀑の底に就かばやとて、下瀑の左なる巖壁を攀ぢ、蒙茸を排き、枯木の自ら僵れて略約となれるが上をわたりゆくに、忽ち峭壁の面を衝いて起るに逢ひ、手板し、足捫し、終に一躍してこれを越えて、溪流の側に出づ。

全石を底となし、水駛く、石滑か也。衣を蹇けてこれをわたり、流れに従うて上ること數十歩にして、初めて潭を隔て、大瀨のかゝれるを見る。絶壁千尺、下よりも高きに、巖の色黝黒にして、石脈の凸凹極めて多く、流水の脈の大なるもの始めわかれて二となり、次に三となり、五となり、七となり、終に千綜萬錯して白雪全壁を厭し、飛躍盤舞して餘沫壑に盈ち、凝りて霰となり、散りて烟となり、水と

夏の月

共に深淵の底より激し來れる溪風、凜として袂を捲き、崖樹の間よりのぞき込む日の光をうけて、眼下に一道の彩虹を現はせり。

ひとりには廣き蚊帳の中、白くほの見えて、あふぐ團扇の音とともにえならぬ香洩れて、縁には、焚きさしの蚊遣火なほいきて残れる夏の短夜に、またぬ月影、はや松が枝にかたむきそめて、さやけき光を、ねやの中まで送れるは、いかなる浮世の外の情ぞや。

蟬しぐれ

夏の旅路の驟雨に、野中の一つ家を、しばしの傘やどりと立寄れば、思ひも掛けぬ情ぶかき女、我を座に延きて、茶よ、菓子よこ、快くもてなすに、身の顫ふまでも嬉しく、

心ある人に一夜の宿かりて馴るゝもつらし明日のふる里

と契沖のよみけむ歌のこゝろ、今更にしのばれて、世はいつまで雨降れかしと思へど、甲斐なし。

點滴はや收まるかと思れば、庭の木立に蟬しぐれ聞えそめて、一道の彩虹、東天に印して高し。

草の山

武甲の最高峰へとて上る。ほつ／＼松あるのみにて、見わたす限り、草の山也。はじめより草の山にあらざりしことは、廢れし炭焼釜の多きにも知らる。あはれ、満山の木、一片の煙と消えたる也。清水流るゝ處に躍して、握飯を食ひ、水を飲みて茶に充てたり。また行くに、路二つにわかる。

右が本道とは思ひしかど、最高峰左に目の先にあればとて、左の路を取りしに、果して廢れし炭焼釜に行きつまりぬ。路なき山を上る。このあたりは、雜木あり。伐られし木重なりて、枝みな下に向ふ。これや自然の逆茂木。辛うじて踏み越え踏み越え、力つきて誤つて握る欄の木、敗戦を擁して人の手を刺すも苦しや。一鳥近く、ちい／＼と啼く。われ上るにつれて、鳥も上る。天帝の使者、われを導くかと疑はる。

秋の情趣

秋の初になりぬれば、今年も半ば過ぎし也。わがよふけゆく月影は、いと憐を添ふれど、暑さ消えて朝夕の風すどしく、起居いとやすくなりゆく。

やう／＼西ふく風身にしみて、蟲の聲々あはれなるも、しかすがに、七草の花、春の花にも増して一種可憐の趣あり。

かくて、五穀果實など、全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋洋として鎮守の森に溢る。

秋の心

秋は、收穫の期也。夏ほどよく雨ふりて、照りつゞき、びく／＼せし二百十日も無事に過ぎ、二百二十日も無事に過ぎ、蟲もつかず、洪水の氾濫もなく、稻はゆたかにみのれり。

やがて收穫終りて、身の閑なると共に、心もいとゞのびやか也。鎮守の祭、乃ちこの際に行はる。葛飾早稻の新しほり、酌むや盃中の激澗も亦恩波、のほりは社頭の木立に趣を添へて、太鼓のひゞき勇ましく、わざ／＼田舎まはりの役者迎へずとも、腕に覚えある俄役者、もとは勘當までせられむとしたれど、親のあてがひし女房の美なるに、心機一轉、女房大事、家業大事と、わき目もふらず、その職に身をいれて、生れかはりしやうなる今の身の上、昔とりしきねづかならねど、放蕩のなごりの隠し藝、人に見せざるは寶のもちぐさり、をり／＼は風にもあて給へとおだて

られて乗り氣になり、好いた同士の素人芝居、見物人が見物人なれば、なほ口あきて見とるゝも懐中物の心配なく、形ばかりの舞臺の上は、隠し藝の土用干、女は著物の土用干、日にやけたる顔に白粉こてゝとぬりたれど、夜目には、田舎の花也。薄における白露を、かくしと讀みて、あつき心は握りあふ手と手との汗にいづれど、顔は離れて、見物するらしく見せかくるは、人目はどかるにや。力自慢の若者、芝居ときそひて、土俵ばかりは本物らしき素人角力、こゝに女の見物すくなきをかこつもあるべし。

豊年を喜ぶは、農夫の上のみならず、中等社會以下、生計の大部分は米代なれば、米のよく出たる秋は、國民一般に腹つとみうつべき時也。

秋 信

寒さより温かさに移ると、暑さより冷かさに移るとは、同じ感じがすべき筈なれど、實際は然らず。梅一りん一りんづゝの温かさにては、吾人はさまで温かなりとも思はず。されど、秋信まづ萩の葉におとづれて、ひやりと覺ゆれば、非常にうれしき心地す。

冷は暖よりも人を刺戟する力あるが如し。冷は零落也、暖は榮達也。少しばかりの榮達よりも、少しばかりの零落の方が刺戟の度つよきも、この理にや。

朝夕に羽織がほしくなり、蚊帳つる面倒もなくなるに及びて、はじめて重荷をおろしたるが如く感すべし。されど、障子のやぶれつくろはざるべからざるも、うる

さしや。

自然をなごせむかな

われ、天を仰いで放吟すれば、長風餘音を傳へ、山鳴り、水涌く。

われ、江山に合するか、江山、我に合するか。心神縹緲として、われまた身の塵世にあるを知らず。

人の心のたのみ難きに似ずして、とこしへに變らぬものは、山と水との姿也。

浮世は、うき世にて、すみ憂きが中に、たゞ江山ありて我を容る。明月我を照らし、清風われを吹く。

岫を出づる雲

塵は汚れたる都の人の岩木をあとにして、心も深き山の奥の岩木の友をとぶらふに、谷川の水は我に向ひて昔ながらの音に語らひ、再々として岫を出づる峰の白雲の、夜青燈を點じて靜に碁を圍む窓の下におとづるも、いと心ありけ也。

黒雲

我足に涌くひとむらの黒雲は出でて下界の雨となるらむ何となく嬉しさならねど小半日山に對して雲を見し哉空屋と見えぬ山家に人はあらず尾のなき蜥蜴出でてまた入る悲鳴せし小田の蛙の聲消えて這ひ出づる蛇の腹ふくれたる

雲霧の美

雲霧ひくゞ地に粘して、乾坤を一幅の墨繪にするも、亦幽趣あり。霧の中に鐘聲を聞いて、舟を見ず。

霧、寺堂を罩めて、塔尖を露はすなど、いづれか詩趣あらざる。

石見の國三瓶山の高原のはづれ、志學温泉といふ處に、霧の海とて、朝霧の眺いと面白し。

霧、脚下に充ち、群峰をつゞみて、わづかにその峰尖をあらはす。なほ群島の海上に漂ふが如し。大抵毎朝この眺あり。これ江の川の水蒸汽凝りて現出せる景也。

雑木林

武蔵野一面、今や、多くは雑木林也。くぬぎ、はんの木など、高きあり、低きあり。花も、見るに足らず。實も、食ふに足らず。

されど、春より夏へかけて、若葉を生じ、杜宇や、雲雀の聲の中、新緑したたむとす。秋は、色は華やかならざれども落葉し、終に落葉して、秃木角立す。幹枝は木材にはならねど、薪となり、炭となりて、全く人間に用なしとせず、これ即ち雑木也。

飛びゆく雲

朝早く鶯鳥の聲に、目さめたり。風收まりて、波平か也。

昨夜、舟をたのみけるに、「風なくば」とうけあひけるが、うれしや、今日は湖上を舟にて渡ることを得る也。

夜はあけたれど、日光は未だ湖上に及ばず。空はよく霽れて、たゞ男體山の方より、湖を過ぎて、彼方に飛びゆく雲のかたまり、いくつとなく相續く。その雲、朝日を帯びてあかく、水にうつりて、水も亦あかし。

あゝ、色彩の美は、雲にあり、雲の朝日夕日にうつるにあり。春の花や、言ふに足らず、秋の山の黄葉紅葉とても、到底雲の美には比ぶべくもあらざる也。

孤雁

はかなくなりし人の思ひ出されて、やるかたもなきに、風も一きは身にしみて、夜はいたくふけぬ。

遠寺の鐘に送られて、いづちゆくらむ、月をかすむる孤雁の聲、いとあはれ也。

秋の聲

春は、花の時代也。夏より秋にかけては、實の時代也。實の遅速は、花の遅速による。百花にさきがけせし梅は、梅雨の頃にみのり、梅雨の前後に花さきし栗や柿や、秋の半以後に熟す。

人の食ひ得べきもののみならで、諸鳥の餌となるべき果實も、亦多くこの際に熟す。従つて雀、鴉などの外、平生みなれぬわたり鳥、多く來る。さびしき色は見ゆ

れど、またにぎやか也。人は云ふ、春はにぎやかにして、秋はさびしと。されど、春は黙する少女也。秋はしやべる年増也。

秋は、聲の天地とも云ふべき乎。行水のすて處なき蟲の聲、夏の末にはじまりて、終夜ねざめがちなる秋の枕の上に通ふ。夏とても、天に雷あり、樹に蟬あれど、夜は螢身をこがすのみにて、聲たてず。秋に入りては、やがて死ぬべき氣色も見えざりし蟬の聲、ばたりと止みて、鈴蟲や、松蟲や、きりぎりすや、すいつちよや、こほろぎや、がちやんぐや、滿地すべて蟲の聲也。武藏の野、三十里、いづれの隈か蟲の聲あらざるべき。

空には、雁來りて、からろ漕ぐ也。樹に百舌來り、ひよ來り、つぐみ來る。山には、鹿つまをこひて鳴く。晝、聲あり、夜も亦聲す。歐陽修の秋聲の賦は、風の聲

のみを説きたれど、秋聲は風のみに限るべしやは。

百舌の聲、するどくして活氣あり。體は小なれども、聲かんばしりて、犯し易からざるの概ある男の如き乎。この鳥、小なれども、鷹の類にて落穂をついばます、元氣が満して鬨を好み、いと小氣味よし。小籠の中に楚囚となり、おとりとなれど、なほ元氣よき聲を絶たざるは、死ぬまで平家を罵倒せし惡源太に比すべし。

もすの聲のいさましきに反して、松蟲、鈴蟲の聲は、清くすどしく、やさしく、宛轉として玉振す。美人の歌ふが如し。

こほろぎのあはれけに終宵ないてやまさるは、綿々たる恨を語る女にたとふべし。横笛が瀧口入道の草庵をたゞきて、胸中萬斛の思を吐きし時のこわねも斯くや。

がちやんぐ近く聞けば、うるさけれど、少しへだたりて聞けば、萬馬雲を蹴つて

遠くゆくが如くにも感ず。

雁一たび蘇武に手紙をくりつけられてより、『唯帯秋來不帶書』と詩人にい
やみ言はるゝこそ迷惑なれ。日本の歌人、陳腐相つぎて、必ず雁に玉章を思ひよす
るのみにて、さまでその聲は賞せず。からろ漕ぐとは、品し得て適切也。賞すべき
程の聲にあらねど、夜ふけて孤雁の聲をきけば、何となく物のあはれを覺ゆ。鏡の
如き秋の空に字を描きて飛ぶもよし、蘆荻洲外湖心の月を砕いて水に落つるさま、
殊に見るべし。

きりくすは、物ごしまだ田舎くさき少女の切口上にて物言ふが如し。

風に定まらぬ梢高くひよの叫ぶは、いとど悲涼也。追分節を聞くが如き心地す。

さるにても、興さむるは、蟲の聲しきる野に、馬を驅る人、幽禽和鳴する森に銃

うつ人也。

野末の伏屋

ありし昔べ 夢に見て

うつつにかへる くさの床、

おくやおもひの 露しけく

たもとに月も やどるなり。

親のかたみと 身にまとふ

ころもはやれて 肌さむく、

花のかんばせ 色あせて

かゝるもつらし みだれ髪。

浮世の人に すてられて

やどと定めむ 家もなく、

たよる方なき 身のうへは

月影のみや てらすらむ。

むかしは父の 家に来て

朝夕侍りし ひとくくの、

たまさか途に 逢ひぬれど

み知らぬ顔に すぐるなり。

見るかけもなき わが袖を

引きしこころの みやび男も、

昨日のさまに ひきかへて

うしろ指して 笑ふなり。

氷よりおほ 冷かに

人の心は 凍りはてて、

塵にとざされし 眼には

きよき涙も かれにけり。

月はくまなく てらせども

ひとりの秋の 心地して

我身につらき 世の中は

夢路ばかりぞ のどかなる。

涙の谷に しづむ身を

神よすくはせ たまひてよ。

あまつ御國の 玉床に

めさせたまへや いざ早く。

おく露つらき くさむらに

うちもわびぬる こほろぎの、

なく音もいとゞ 身にしみて

浮世に秋は ふけにけり。

鹿のちまたに すむ人の

夢もまどかなる 小夜中に、

野末のふせや 風あれて

村雨すこく そよぐなり。

黄 菊

髪がくろく、えりあし白く、姿すらりとして蓮歩を移す少女と、ゆきすぎがてらに、ふりかへれば、手にもてる黄菊兩三枝。

御 花 畑

女貌山中の幾峯槽を登降し、小眞子山も越え、大眞子山も越えて、志津といふ處に來れば、日影巳に男體山の西に隠れぬ。

これより路を右に取りて、林樹の間をたどりゆくに、われを見て驚き走る怪物は、鹿にやあらむ、麋にやあらむ。一里ばかりわけ入りて、太郎山の麓に達す。やゝ登

りて右に折るれば、路は絶壁の半腹に出づ。この處呼んで、太郎山の新薙といふ。山の上より谷底まで削り落して、絶壁の上は高く雲を帯び、下またその盡くる所を知らず。人は巖角を踏み、峭身に密接して、板摺して横に之を過ぐ。その危険なること女貌の剣が峯に譲らず。かくて遂に山頂にいたりたれど、薄暮冥々、雲烟慘憺として久しく居るべからず。

や、下りたる處に、方敷町なる芝原あり、御花畑といふ。一面紅緑相交りて錦氈を布けるが如く、浮世には見しこともなき奇草珍卉の咲き亂れて異香馥郁たるは、仙客薬を采るの處かと疑はれて、をかしさ言はむかたなけれども、歸路のきづかはずさに、匆々にして山を下りしが、戦場が原に出でむとする林樹の下にて、遂に壑舟となりぬ。

海上の落日

晩風涼しき海の上、夕陽の光、斜に射て力なし。
雲色慘として、洪濤の餘沫、むなしく巖に咽ぶ。

夜の海

酔に乗じて濱邊を逍遙して旅館にかへり、一睡して覺むれば、夜はまだ二時也。鄰室には、雑談の聲たかく、まどろまむとするに、目ますくさゆ。苦しきあまりに室を出でて、また海邊をあゆむ。
草木今は睡りつくして、浪の聲ますくたかく、巖に激し、零路音なくして人の

衣をうるほす。

村雲、そらにいそがしくして、月も走るが如く、光うすうして乾坤夢よりも淡し。

岸の姫松

満潮の刻はすぎたれど、溝はなほ磯にたかく、天外より潮氣を吹き送る天風に應じて、軒近き岸の姫松、漫々の音を發すれど、さすがに枝上幾百顆の月影をこぼさず。溝にまぎれざる松蟲、鈴蟲、蟋蟀の聲々、殊に秋氣をそへて、ひやゝか也。

露の聲

夜更けて、風全く死したり。

遠寺の鐘聲、烟霧の外に沈みて、人跡絶えたる白砂青松の間のしつけさは、梢より落つる露の聽くに聲あるばかり也。

草葉の白露

木蔭に打伏しけるに、夏の日もいつしか西に入りぬ。

夕月の影すゞしく池水にうつり、白露草葉におき添ひて、近く聞ゆる水鶏の聲も、人のおとなふかとあはれ也。

秋蟬

園にひと夏 なきつくし

聲もよわれる うつ蟬の
力もなけに すがれるを
ねらふ童兒の うたてさよ。

蟬はかなしき 音にいでて

やよやわらはべ 今しばし

見のがしてたべ 我がいのち、

心のかぎり 泣かしめよ。

つらき野わきの 風たちて

露はしゆくも 置きにけり。

残の日影の 消えゆかば

やがて終らむ わが身なり。

秋 霧

夜は、はや更けぬ。いざさらば、御縁もあらば重ねてと、いひつつ身を翻すよと見
るほどに、その姿は、はやくも秋霧の奥にかくれて、笛聲むなく、松濤の外に嘯
鳴たり。

山路の夕霧

つるべおとしといふ秋の日、はや西山のかなたに隠れて、夕霧いと深くたちこめ
たる山路、旅に慣れたる身にも、何となうさびしく、やどりを急ぎて、一徑の落葉
をふみわけつつ下るに、簇々と音する聲、谷の木魂にひびきて物凄く、巨人の息す

るが如き西風遠く孤雁を送りて一天高く、脚底の數家の村にたちのほれる烟もかすかに、ねぐら求めて飛びゆく晚鴉の聲いとあはれ也。

松島の日出

黎明、客を呼ぶ汽笛の聲に、夢は孤衾鐵の如き鹽釜の客舎に破れぬ。蓐食して、船に上る。

日は、はや松島群島の上にあらはれ、大きき晝間見る所に幾倍して、未だまぼゆさ光を放たず。天光水色相映じて、曉氣いと清爽也。やがて船は、煙を残して出づ。鹽釜洞の林丘、曉霰の外に依稀として、我を送れり。

秋の夕暮

郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色悲しみ、西風冷かにして鳥聲秋の恨を語る。

馬の嘶く聲まづ聞え、小唄聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるままにて、馬の自ら歩むは熱せる路にや。

晚鴉飛びつくして、四面寥廓たり。ふと顧みれば、招く尾花の末に一團の大月明らかかなり。

堤上の夕陽

白鷺の小首かたむけて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。
夕陽傾きて、柳影長き堤の上、ゆきかふ人なし。巨蟹はひ出でて泡を吐きつつ、
螯を舉げて空を挟む。

秋正にたかし

庭をへだてたる一室に、嬌歌の聲、三絃の音と共に起る。かくて、月はまた上りぬ。
今宵は既望なれど、清光はきのふにことならず。空いとよく霽れたり。
夜しづかにして、大平洋上秋正にたかし。しばし月をふみて、眠につきぬ。

曉風

日出をのぞみたる後、旅装をととのへてかへらむとす。草上の露未だ晞ず。曉風
秋風をよせてひややか也。

きのふ我をたづね来て、紙障の間に款々たりし燈心蜻蛉の命は、一夜の秋につき
けむ、冷かになりて、障子の骨によこたはれり。

月の隅田川

都の残暑をよそにせる水郷の別世界もがなとて、友と共に隅田川に舟を浮ぶ、溶
々たる流れ、櫻の葉越しに見えて、風いとすじし。
日暮れて、興ますく、酣也。仰いで明月を見る。
老いたる舟子、一人にて舟を漕ぐ。上流に溯る。月は白く、風は清し。四面蒼茫。

として、往きかふ舟も無し。櫓の聲、舟の水を切る音、天地の寂寞を破りて、友の顔ばかり光る。

荒川と綾瀬川と相合する處、蘆荻しけれり。舟をその蘆荻の中にとどめ、舟夫を呼びて、共に語る。

青々たる蘆荻は、自然の屏風、四顧たゞ月を見る。涼風面を吹いて、快言ふべからず。

立待月

西國の歌枕見むとて、そこはかとなく、あこがれゆくに、三月ばかりは終にけり。はや須磨の浦曲に秋風たちて、置きそめたる白露も、分別ありてにや、取りわけて

古戦場の草に繁く、無官太夫の墓荒れて、蟲の音いど、憐を添ふる夕、さやかなる立待月の影にそむきて、旅館の中に過さむも、心なきわざにとて、獨りたちいで、足にまかせて濱邊を歩めば、蟹、船蟲などの、人の登音を我が事と驚きて、逃け行くも可愛らしきに、蘆花雪を吹く邊に、白鷺の小首傾けて捨小舟の番する顔なるを、こよなき相手と石に腰掛けて眺めけるに、近く笛の聲す。

敦盛の亡魂の青葉吹くにもあらざるべきにやなど、獨りごちつつ、聲するかたを顧みれば、年老いたる一人の虚無僧の餘念もなく月をふみて尺八を吹きすますなりけり。

芋明月

限りなきの清光三千世界を照らし、無量の清韻寰宇の外に溢る。接々たる俗輩は
いざ知らず、磊落瀟洒の胸襟を有する者、如何にか此中秋を賞せむとする。

若し夫れ高樓綺筵、絲竹を鬪はし、豪興を極むるは、我黨の事にあらず、破窓を
開いて明月に對し、床塵を掃うて新友を迎へ、古詩を吟じ、古歌を詠じ、古今の成
敗を論じ天下の大道を説く。酒なく、茶なく、唯甘藷の一盤に堆きを見るのみ。

世、中秋の月を稱して芋明月と云ふ、蓋し芋正に此の際に熟するを以て也。知ら
ず、天公亦われらを慰めんとする乎。

一盤の芋をわかちて君とわれ浮世の外の月を見し哉

糸 萩



夕立の名残も見えて糸萩の葉毎にやさる月の影かな
草はみな刈りつくされし土手の上にひとむら残る女郎花かな
手折れるは何ぞと問へどほゝゑみて少女語らず花もの言はず
子を思ふ心ひとつの柿の實を父くへと言ひ母くふなと言ふ

秋の蘆の湖

湖の周圍に路あり。湖尻より歩いても知れたものなれど、余は舟行といふことに
興味を有す。わざ／＼一時餘も待ちて舟を得たるが、果せる哉。神山の湖水に面す
る處は、満山みな紅葉、水に映じて水も亦赤し。
願みれば、富士も外輪山の上にあらはる。逆富士は見られぬかと舟夫に問へば、

今日は風ありて漣立ち居れば見られず。漣さへ無ければ、いつでも見られるれど、朝が最もよしといふ。逆富士は舟でなくとも見られるれど、神山の紅葉の美観は、舟行の賜也。

湖尻より北岸を行かば、身は密林の中に没すべし。南岸を行かば、神山方面は見らるべけれど、湖心の舟中より四方の眺望を縦にするといふやうな譯には行かず。よしや紅葉の美観は無くとも、四面山に圍まれたる山上湖、啼軋の聲を天地に響かせて、身は白鷗と共に浮び、心は雲と共に飛揚するの趣は、實に舟でなくては得られざる也。

自然の奥

わが園中、兒を喜ばしむるものは、梅の實也、葡萄也、柿也、栗也、無花果也、筍也、鯉也、とんぼ也。

是等に對して、兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、たゞうれしき也。欲もなし、名利もなし。沈思して自然に對すれば、はじめは、その愛すべきを覺ゆ。終にその敬すべきを覺ゆ。

自然の奥には、何等かの神異物ひそめるが如く思はる。

高尾山の眺望

本道より老杉の間を上ること、僅々四五町にして、はや高尾の峰上に達す。路は峰背に通じて高低一ならず。ベンチある處に至りて休息す。八王子も玉川も、脚下

にあり。關東の平野蒼茫として、筑波山天地のはてに淡く見ゆ。淋漓たる流汗を拭ひ去つて快言ふべからず。

本道に眺望の開けたるは、たゞ此處のみ也。杉苗奉納の立札見えそめて、本堂の近きを知る。兼ねて神靈の驗著なるを知る。その立札幾萬枚があるらん。路の兩側に並び、恰も板塀の如し。板塀つきて石段現はる。石段の上に仁王門あり。佛堂あり。左の低き處に、藥王院の本坊あり。參詣者請うて、宿泊するを得べし。數百人を容るゝに足る。

更に石段を上れば、飯綱善神の本堂あり。丹碧燦然として、嵐翠の中に輝く。祠後更に數十間上れば、奥院あり。これ高尾山の絶頂なるが、眺望は無し。眺望を縦にせんとせば、なほ三四町進みて、高尾最奥の峰を攀ぢざるべからず。ここに至れ

ば、木立なし。四方の眺望ひらけたり。さきの途中の眺望は、とても比較にはならず。唯、この日曇りて、折々微雨至りければ、富士山は見えず、日光山も見えざりしが、關八州は脚底に在り。さきに見えたる筑波山も見え、總房の通山も見ゆ。酒匂川の末に、相模灣天と連り、巨壑の如き江島、手に取れさう也。

壯快なる哉、都門黃塵の中に喘ぐ者、僅々三四時間を費さば、この自然の大觀に接するを得べき也。

本堂より五六町下りたる本道の側に、茶店あり。そこより右折すれば琵琶瀧を経て本道の入口に相合して、甲州街道の新道に出づべく、左折すれば、蛇瀧を経て甲州街道の舊道に出づべし。

この日、歸路を急ぎしを以て、路を愛宕に取りて、一呼して下る。これ高尾山の

最捷路也。

いが栗と共におりゆく山路かな

鹿と猿

路は海をはなれて、峰に上る。もはや見るべきものもなければ、足を早めて急行するに、いつしか獨往の客となりぬ。

脚つかれ、湯を催したる時、天狗の力水とて、巖隙より出づる清水を得たるこそ、いとうれしかりけれ。

峰また峰を上下するに、一鳥鳴かずして、山更に幽なるを覺ゆ。巖石のにはかに動くと見れば、臥したりし鹿の、わが蹻音を聞きてにけてゆく也。鹿より小なるも

の驚いて走る。幾たびとなくふりかへりて我を見るは、人が恐ろしきにや。その前方の顔赤く、後方の尻もまた同じく赤きは猿也。

はじの程は、これ顔、これ尻、見わくることを得しが、終には見わけつかず。而して猿のふりかへること、なほ止まず。一赤一赤相回轉して、遠く白雲深き谷底に落ち行きぬ。

十和田湖の特色

十和田湖の勝景の大要をあけむに、「山湖」として、最も偉大なること、一也。奥入瀬の溪流の幽静、天下に無比なること、二也。湖の四周の山ばかり樹のしけりたるは、他に比なきこと、三也。紅葉の美、四也。中海の断岸高く、木ふかきこと、

他に比なし、五也。諸島みな岩にして、松を帯びたること、六也。奥入瀬の本流支流に、高きは松見の瀑、廣きは根の口瀧を始めとし、見るべき瀑の多きこと、瀑布多しと稱せらるゝ日光、鹽原などの比にあらざること、七也。その他、白龍神社の危巖、御倉山の千丈幕、御門石の疊石、碁盤石、雅俗とりくゝに趣味あり。けに、十和田湖は、風光の衆美を一つに集めたる、天下有數の勝地也。

余は、十和田湖に遊びて、四通りの路を経過したり。小坂よりの路と毛馬内よりの路とを取らば、湖の一部を俯瞰するを得べし。されど、十和田湖より奥入瀬溪を取り去らば、十和田湖の勝は、その一半を失ふべし。且つ三本木より奥入瀬溪を経るの路は、最も平坦也。

余は、天下、山川を愛するの士に告ぐ。必ず往いて十和田湖を見よ。往きか、歸

りかには、必ず奥入瀬溪を過ぎよ。同じ道を往復するを好まずは、小坂か、毛馬内か、いづれを選ぶとも、さしたる差別なし。大館より小坂銅山まで軽便電車のひらくること、近きうちにあり。小坂より湖畔までは、凡そ四里の程也。後の遊者は、この利器によりて小坂より鉛山に來り、たゞ休屋附近を見て、奥入瀬の勝を閑却するもの多かるべし、惜むべき也。

十和田湖畔

十和田湖畔に到り、ひとり靜に中秋の月を賞せむとて、心勇む。午前八時宿を發し、小坂銅山を經、鉛山を越えて、午後七時、銀山の旅店に投ず。この路、十二里と稱す。されど、實際は十里ぐらゐるものなるべし。唯一つの旅店あり、直に水

に臨む。解化を經營せる和井内氏の兼業とする所也。

この夜、空くもりて、心に明せし月は見るに由なかりき。

客舎無人共獻酬。遊蹤歴歴座間浮。

山靈水泊不相答。月黒十和湖上秋。

女郎花

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。

馬頭觀世音の石像、頑として物いはず。側に生ひいでたる幾莖の女郎花、なよくとして風にもだゆ。

秋の夕

心づくしの秋の夕、何となう涙のこぼるゝに、亡き兄のことども、そとろに思ひ出され、涙、秋風に落ちて自から聲あるを覺えず。

やがて青山なる、その墳墓にまうでぬ。西に沈みたる夕陽、一帯の暮雲に残照をとどめて、卒都婆の文字明らかに、刀稜に似たる涼風肌にしみて、人を招く尾花の下に、餌をあさる狐の聲いと冷か也。

桔梗の咲く頃

草刈る少女の馬にのりて來るに逢ひぬ。面識なき他郷の人に向ひて、なほ敬禮を

表せるは、素樸の風厚き山里のならばしにや。

笑顔を告別に添へて、桔梗、女郎花などの咲き亂れたる芝山深くわけ入りつゝも
静に謠ふ小唄の聲やさしく、馬の嘶く聲も調子を合せたる、をかしさ言ひ知らず。
かゝるほどに、徐々として山を捲き來る白雲に、花の姿は奪ひ去られて、なほ嬌
聲の洩れ來れるを聞く。

蒼々茫々

疲れたれば、しばし休息せむとて、磯に腰うちかけたるが、ねむたさのあまりに
知らず、眠り入りぬ。
自ら名を呼ぶ、慈悲心鳥の聲に驚きて、目をひらけば、月魂中天にかゝりて、清

影水に落ち、夜色蒼茫として、四山夢よりも淡く、満天の白露墜ちて聲なし。空明
時に潑刺の音あるは、赤腹の躍れるにや。

小春日和

一番馬車にて、大宮に向ふ。右には、小山直に路に通り、左には、清溪崖下を流
るゝを見る。眞に清流也。

底まで、すき徹りて見ゆ。巖石もうるはし。隅田川も、こゝまで來れば、かく清
き也。

目、山上に出で、小春日和、ほかくと暖し。

三十年を荒川の下流にくらして、今日はじめて、その上流を窺むることかと、心

もいさむ。

前方に峙立せる秀峰を見るに及びて、心ます／＼いさむ。問はずして知る。これ武藏第一の名山たる武甲山也。

曉雲に輝ける山

雨霽れ雷止みて、名残の露のいとしけき杉の梢に啼く梟の聲に山の端の月落ちて朝日子なほ東山のかなたにたゆたひながら、早くも空にほとばしれる光銃に射られて、五彩の錦の幕をかたどれる一帯の曉雲の上に、屏顔うるはしく現はれ出たる日光の山々、左に峙ちて崢嶸たる男體山、右に聳えて嵯峨たる女貌山、この二山の間、に磅礴して男峰に近き大真子山の翠棒たる、女峰に近き小真子山の嶺岫たるなど、

共に半空に摺疊して嵐翠滴らむばかり也。

空山の孤猿

湯本温泉にやどりて床に就きけるが、明日はとく立ちいで、白根山の巔にのぼらむと思へば、心自から勇みて眠られず。

夜深くして陰雨しめやかに、奇寒肌に浸みて、夏としも思はれず。
四山、寂として、近く樹梢に啼く猿の聲いと哀れ也。

一脈奇寒過客房。 殘燈明滅夜凄凉。

狐猿咽盡四山雨。 聽到三聲欲斷腸。

秋の大山

米子、尾高を過ぎて、大山の裾野を上る。一步一景開け仰ぎ見し雲伯の群山、い
 つしか脚下に落ちぬ。傾斜なる裾野、石佛人を導き、眼界を遮るべき樹木なけれど
 も折々喬松あり。之にはひまつはれる蔦、霜に染みて、殷紅目を奪ひ、松の翠色映
 發して、美しさ言はむ方むし。

行路の右、くほみ落ちたる山川のかなたは、一面の雜木林、うすく濃く紅葉して、
 露のたて、霜のぬき、山姫の織れる錦の色はえて、見る目もあや也。

眼を上につせば、大山の半面より谷あひをかこめる連峰へかけて、満山みな紅
 葉、くれかたの薄霧の中にも、色なほさやかなるに、我心頓に躍りぬ。

裾野つきむとして、路は林樹の中に入る。二列の松杉を除したる外は、樹木みな
 紅葉し、松杉には蔦紅葉まつはれり。この紅葉の墜道を行きつくした處に、銅の華
 表あり。裾野ここにつきて、大山寺あり、大山神社あり、宿屋十餘軒あり。華表の
 側の旅店に投げけるが、日暮るゝには、まだしばしの時刻ありければ、草鞋を穿き
 かへ、華表をくゞり、勾配の極めてゆるやかなる石磴を上る。

左右は、もと幾十の支坊のありたる處なれども、今は衰廢して残れるもの少し。
 行きつまりたる處に、本堂あり。右に谷川をわたりゆけば、阿彌陀堂あり。この
 大山寺は、もと養老年間、金蓮上人の草創にかゝりしが、後、平安朝にいたりて、
 慈覺大師ここに丈六の地藏菩薩を安置し、始めて大山寺と稱せりとかや。この後、
 幾度の改築ありたれど、阿彌陀堂の如きは、最古のまゝの材木を用ゐたりといふ。

雨淋風打に古色蒼然たる阿彌陀堂の用材は、實に千年以上のもの也。

本堂の四五町手前を左折して、四五町行けば、大神山神社あり。拜殿の宏壯なること、恐らくはこれ山陰第一なるべし。祭神は大己貴命也、銅華表よりここまで、凡そ十町、右には大山の主峰あり、左には豪園の蓮峰あり、奥には劍峯屹立せる谷あひなるが、山高く谷深く目の及ぶ限りの峯々は、所謂満山みな紅葉にして、四顧靡接に違あらず。然も賽路の左右には、翠色滴らむばかりの喬松老杉立ちつき、四面の紅葉との調和をたもちて、風致單調ならず。

満目翠樹ならぬ處は紅葉、紅葉ならぬ處は白雲涌き、その間に古祠廢寺點綴す。何等清絶幽絶の地ぞや。余はたゞ大山の巔を蹴て、千里の目を縦にせむとて、ここに來りしに、豈圖らむや、この紅葉の壯觀あらむとは。日光碓氷は、郡人士多く遊

びて、その紅葉の名、世に聞えたれど、こここの大山の紅葉、日光碓氷に優るとも劣ることなきも、山陰の僻地にあるをもて、夜の錦のたとへにもれず、見る人なくして、むなしく秋を飾り、また空しく散る、惜しむべき哉。

山村

いつの間によら、水流れ出でて、溪を爲し、野飼の牛のあちこち、ぶらつくを見る。畑見えそめて、一簇の人家あり。砂川村と稱す。山間の狭地、農耕のみにては、生計を立つる能はざるべく、養蠶事業は、機杼の聲にもあらはれて、路をはさめる桑の大木、自から並木となる。東京附近には見ざる光景也。土地稍ひろくなりて、従つて一簇の人家も稍多し。ここを青木村と稱す。

右折すれば、脚下に、根利の溪流を見る。赤城山は、東にも、西にも、南にも、裾野を有して、その大なること、關東第一なるが、たゞこの方面のみには、裾野なく、根利川、溪谷を爲して、巨木しける。

根利川の片品川に合せむとする處に、南郷とて、三十軒ばかりの人家、散らばりて、根利川を夾む。赤城山上の赤城祠よりここまで三里と稱す。

夕の煙

亂山の底に、炭やく煙、幾縷となく立ちのほれるが、雲のすきめより逆射する夕陽の光をうけて、一半はあざやかに、一半はうすぐらく、末は風にまかせて、自ら消ゆ。

石楠花

冷風蓬々として天花の亂れ墜つる岩陰に、石楠花の咲き残りたるは、仙女の落せし衣の袖かと疑はれて、いとなつかし。

幽々寂々

眼下の群峰、人界を封じて、仰いでたゞ天を見る。

人跡なく、飛鳥なく、萬物みな枯靜に歸して、天人さゝやくがごとき天風ひとり活きて動く。

われ、杖によりて長嘯すれば、深谷遙に答ふ。衣を振ひて飄然として徘徊すれば、

白雲脚底に生じて、われながら歩虚の仙の心地す。唯高山夏寒うして、凡骨久しく堪ふべからず。

静寂と幽味

「たゞ見れば何の苦もなき水鳥の脚に暇なき物思ひかな」と詠じけむ。閑中の閑は眞の閑にあらず、忙中の閑が眞の閑也。動中の動は、眞の動にあらず、静中の動が眞の動也。
『一鳥鳴かす山更に幽なり』は、幽味なほ淺し。『一鳥聲あり山更に幽なり』が、幽味の深きを覺ゆ。

秋の山

秋に入れば、茸生じ、栗笑ふ。霜下れば、満山忽ち錦繡となる。
群鳥、木の實に來り集り、孤猿夜月に啼く。
春の山よきか、秋の山よきかななど、優劣を論ずる人もあれど、もとくらくらべ物にならず、山は秋に限り申候。

昇仙峽の絶景

精進村を過ぎて、阿難嶺を越ゆ。登路は、十町ばかりなれど、降路は一里に餘れり。雙峰の間、前に龍戸山を仰ぎつゝ、迂曲せる溪流を渡ること、十六七回上ら

ば苦しかるべけれど下るには易くして、且つ風光の幽にして美なるを領す。駿河の大宮より甲府に通ずる國道精進湖畔について、最も趣味ある處也。

古關村を過ぎて、末は富士川に合すらむ、水の流れ、いと清し。水音の外に音するは、河鹿のなくなるべし。

溪畔膚寸の地を畑と田とに兩用すればにや、溪間に似合す、農家多し。溪に沾うて下ること半里ばかりにして、迦葉嶺を攀づ。これも上りは半里ばかりなれど、暑さに苦しく、喘ぎく上りて、漸く峠に達すれば、うれしや、茶屋ありけり。今朝たちたる人、元村より八里の路程也。四時半に發足しけるが、今は十二時を過ぎたり、まづ水に渴を醫して、酒を問ふ、あらず。たゞ瓶の中に残れる焼酎わづかに五勺ばかりあり。友と兩分して飲む。飯を問ふ。あらず。素麵を以て午食に充つ。

かくて、腹はりて、店外に立つて眺望すれば、峽中の平原、寸眸に收まる。主人指點して曰く、平原の北方、瓦鱗の相連れるは、甲府也。ここより四里の路あり。甲府の東なる川を笛吹といひ、西なるを釜無といふ。兩流相合したる處、即ち富士川也。釜無川の方角に、裾野を控へて、峙てるは、八が嶽、高さ九千尺に餘れり。笛吹川の方角にある高山は、金峰山八千五百尺の高さを有すと。されど、高き山々の上には雲あつて、その巔を見る能はず。嗚呼、この見渡すかぎりの山間の天地は、當年の人傑機山の故地也。掌大の山間、もとより英雄を容るゝに足らず。南に出で、徳川をなやまし、東に出でて北條を苦しめ、北に出でて謙信と雄を争ひ、終に西に出で、織田を倒さむとせしが、あはれや、野田城上、笛聲清き夕、雄圖一發の銃丸に碎けて、峽中の天地落莫なること、ここに四百年、英雄また起たず。山空

しく翠に、水空しく流る。

山を下り、左右口、土管根を経て、笛吹川を渡る頃、雨ふりいでたり。甲府の市街を通りぬけて、御嶽の新道を取り、和田村を経て、和田嶺を攀づ。十町ばかりの上り路なれど、上るに困難を覺えたるは、朝早くより歩きつゞけたればなるべし。三本松の下に、近頃出来たる休茶屋あり。休息して眺望す。笛吹川や、甲府の市街や、すべて脚下にあり。さきに迦葉峠にて南より望みたるを、今ここに、北より望む也。甲府までは、一里に足らずとぞ。

丸山村を過ぎ、峯脈を西に越えて行くこと一里餘、道はじめて荒川に接したる處に、數千間の平地あり。松の木の下に、天神の石龕あるを以て、天神平と稱す。一軒の休茶屋あり。御嶽までは何里あるかと問へば、二里ありといふ。雨はやみたれ

ど、曇れる空、早く暮れて、蒼煙、溪谷に滿つ。終に乞ひて、やどる。宿屋ならねど、別に客室ありて、氣持よきこと、昨夜のやどの比に非ず。四十あまりの家婦、お世辭もなければ、悪氣もなく、天真爛漫也。持ち來れる浴衣に著かへたるに、帯なし。帯をと言へば、立ちたるまゝにて、腰紐ときて、なけ出す。

十時、寢につきたるが、蚤の外に、蚊にせめられて、十二時にさめて、また眠る能はず、罪なき顔して熟睡せる友を見れば、いとうらやまし。

やがて、草木も眠る丑三の空、夜氣、山氣凄涼として肌に通る。雲の絶間に、數點の星影見ゆるのみなれど、全くの暗夜には非ず、茅屋の形、わづかに認めらるばかりにて、乾坤蕭森たる中に、滴泉ひとり聲をなして、我に天上の秘密をさやく如きも、いと、うれしや。

午前七時、發足す。この天神平より猪狩村まで、荒川の沿岸、凡て一里半の間、これ所謂昇仙峽也。山これ巖、巖これ山なる數十峰、相連りて、二重の屏風を立てたるが如き間に、一道の荒川、白龍を躍らす。巖は花崗岩龜裂したる間より松生ひ雜樹生ひて、巖に一層の風趣を添ふ。かゝる岩の峰、一つ送れば、一つ迎へ、目幾ど應接に違あらず。溪流潭となり、淵となり、急湍となる間にも、巨石磊砢たり。猿に似たるものを猿岩と云ひ、富士に似たるものを富士岩といふ。蟾に似たる蟾石を路傍に見て、少し行けば、石碑立てり。天保年間、この路を開きたる農夫圓右衛門の像と、林鶴梁の贊とを刻めるが、兩斷せられたるは、何者の惡戯にや。また少し行けば、山壁の巖、倒れむとして倒れず、一巖支へむとして支へず。巖と巖との間、少しの隙間ありて、自ら石門をなす。溪を見れば、飛瀑あり。雪江瀑といふ。

その傍に、浮石とて、いと白き岩、横はれり。數十間歩みて、昇仙橋上に立つ。顧みれば、右には最も奇形なる覺圓峰、天を刺し、左には遮雨岩、之と相對す。二大漢、天に鬪はむとして、眉を怒らすが如し、之を中心として、前後左右、巖これ山なる奇峰、撩繞し重疊す。二漢の鬪を止めむとするも、猛威に恐れて敢て近つかざるが如し。このあたりは、昇仙峽中、最も奇峭雄偉を極むる處也。

橋をわたり、數十間行きて、仙岫瀧を見る。溪身一落して、六七丈の懸崖となり全溪の水、總束せられて奔飛す。瀑の側の巨巖を切りぬきて、洞門となせる處を過ぐれば、流れも、山も、平凡となり、猪狩村とて、二三十戸の寒村あり。仙寰を出でて、また人界に入りたる也。

また行くこと半里にして、一簇の人家を得たり。宮本村といふ。祠あり。これ即

ち御嶽の金櫻神社也。いと宏壯なるが中にも、神樂殿、殊に精巧を極む。こゝより金峰山まで何里あるかと問へば、六里ありといふ。
昇仙峽を見て、御嶽祠に詣つるのみにては、尋常の遊蹤に過ぎず、山水に忠實なるものと云ふべからず。されど、例の金も、時も、つきたれば、旅はこれを限りにして歸りけるが、遊意勃勃として禁ずる能はず。思ふに、昇仙峽の石門や、仙娥瀧や、荒川の溪流や、みな奇とするに足らず。たゞ巖こけ山なる兩岸の數十峰、殊に昇仙橋上の眺望は、日本山水の一珍として可也。

斷魚溪の奇絶

矢上川の江川に會せむとする處に、八面橋かゝる。その橋のたもとより南折すれ

ば、路は矢上川の右岸に通ず。兩山の間には、一條の清溪と行路とあるのみにて、山のやゝ川に遠き處には、一三の茅屋を點す。當面に高かりし焚火山、いつしか後になりて、危橋路を左岸に導く。地偏に山深くして、霜下ること早く、霜葉二月の花よりも紅なる色を帯びて、翠樹の色にまじれるが中に、をり／＼一種鮮明の色あるを諦視すれば、狂櫻のさける也。

八面橋より一里半ばかり來つらむと思ふ處に、古杉數株苔氣自から迸りて、一字の稻荷祠神さびて立てり。對岸は、橋かゞらとて、一帶の巨巖屏風の如く峙ちて遊鱗を護れど、淵は新道より碎け落ちたる石の爲に淺くなりしこそ惜しけれ。その淵の上は湍と云はむよりは寧ろ瀑と云ふべく、溪流巖壁を瀉下す。是れより以上に、魚上ること能はざればとて、此處を魚切といふ。斷魚の雅稱は、やがて是れよ

りいでたる也。而して斷魚溪の奇は、此處より始まらむとす。

溪流あふれて路を奪ふ處、人は側の巖壁にすがりて過ぎゆく。その巖も溪身も、一面の石にして、横はりての底となり、立ちて斷崖となる、その溪の底となれる大磐石、遠く平かにひろがりて、全溪にわたる。之を千席澗といふ。その磐石の下部水を被るのみにて、水は一條の小溝を磐石の中央に開きて流る。全澗の水、この一小溝に集沖せらるゝなれば、深く且つ早く、奔馬の勢も雷ならず。柳州が全石を底となすと記せるも、ここまでは大ならざりしなるべし。けに幅數十間、長さ之に倍蓰し、萬人をして坐せしむるに足る。而して水は溪底の磐石よりも一層下り流れゆく。これ天下幾どその比を見ざる所、奇なる哉。

千席澗の上部は、同じ一つの磐石高まりて、磊々として嶮岫溪中に氷山の形をな

す。巖角を蹶んで上りのゆけば、呀然として缺け落ちて、數十尺の下に、一條の淨流飛舞し、奔騰す。ここを駒の頭と稱す。このあたりの巖のさま、怪にして奇、水のさま恐しきまでに雄偉、唯これ白龍の狂ふかと疑はる。その音聲とて山谷響應し、更に人語を辨ぜず、水の巖に激する處、水烟蓬として起り、その水烟の中より面を衝いて來る一種の冷氣、水中の巨靈の吐き出す息かと覺えて、爽快極まつてかへつて物凄く、此處は千席澗の奇に怪を加へ、幽峭にして壯大、竟に名狀すべき言を知らず。

駒の頭の上は、巖さけ水あふれて、歩行すること能はず。三四町の間、右岸の路をつたひゆきて、また溪にくだれば、一面の大磐石、全溪にわたりて凸凹一ならざること、駒の頭とおなじく、ここにも一道の飛流大巖をつんざいて、巨靈咆哮、銀

箭亂れ射る。その塊奇雄壯なること、駒の頭と伯仲の間にあり。ここを瓶が淵と稱す。千席潤よりここに至るまで凡そ七八町の間。大磐石全溪にわたり、水はその磐石に一條の血路を開き、瀑となり湍となり、遂に小溝を作りて流れ去る。これ斷魚溪の奇とすべき處也。殊にその二三里の溪間深篠焚火の二高山突兀として天を刺しその他山骨を露はせるもの樹木を帯びたるもの、周匝連互して清をかこみ、飛瀑かゝり、紅葉點綴す。斷じて、これ天下の奇絶の地也。

金澤八景

人よりもよく路を暗したる田舎馬の、手綱は鞍に預けたるまゝ、心ゆたかに煙草をふかしつゝ、徐ろに乗り行く一人の農夫の後姿を右に顧み、左に懸崖くづれて水

聲流る溪流の上の丸木橋を渡りて、爪先あがりの小山路を四五町ばかり上りゆけば路二つにわかれて、大さほど相似たり。側に庚申塚あれど、路程はしるさず。見ざる、聞かざる、言はざるの三柏子揃ひ居れば、まゝよ、杖の倒れし方に路を定めむとて、我持てる杖を立てむとすれば、待てよく、後から人が来ると、友の呼び立つるに、成程、生きた棒に問ふが、一番慥かなりとて、しばし待つほどに、やがて来りたるは、二人づれの旅商也。金澤への路を問へば、兩方共に金澤に通すれども下の路が少し近しといふまゝに、共に伴れだちて、山腹を縫うて蛇行する小路をたどりゆく。

左は小山にして、右は一層一層と高まれる小山田也。その小山田の彼方には、また小山あり。さて左なる小山の上に枝おろす樵夫ありしが、その伐りたる枝落ちて

地上に横り居たれば、樵夫、さきなる旅商を認めて、お邪魔さまと、ねんごろに謝すれば、旅商はまた、どう致しましてと、挨拶いとどうや／＼しけ也。

風、そよ／＼と我顔を撫で、日影ほか／＼と背に暖く、こゝかしこの木陰に、鳥の鳴く聲す。

兩方の小山、だん／＼近寄るにつれて、山田は漸く狭くなり、遂に山田全く盡きて、兩山相合す。その相合する處を一躍して越ゆれば、山また開け、山田再びあらはる。かく田畝の開けることは、關東に於て多く見る所なるが、かゝる山田に如何にして水を引くかと、怪しみながら語りあひつゝ行くに、何處より湧き出づるとも知らぬ山の水の、いつしか集りて小溝をなし、はては小溪となりて、涓々として流るゝ音、水は此通り澤山ありますとて、我を嘲るに似たり。

金澤の入口を右に折れて、山を六七町のほれば、能見堂の舊址あり。堂は維新の際、とりはらはれ、筆捨松のみ依然として立てり。その大さ、四抱にも餘る。蓋し五六百年前のもの也。その松の下に、さゝやかなる一軒の茶屋あり。爺は、うらの畠に草刈り、婆は勝手口に洗濯しけるが、我等を見て、いそ／＼と出で來り、いざ薄茶一つとて、立たむとするを呼び止め、茶よりは冷水が所望と言へば、やがて、二個の大なるコップに水満々と盛り來る。之を一口に飲みほしたれど、渴やまず、また一杯づゝ飲みたれど、渴なほ止まざれば、また／＼一杯づゝ飲む。飲み終りてまた水のことか氣にかゝり、この山頂でも水が有るかと問へば、それは／＼結構な井戸がありまする、よい水だとして、わざ／＼水飲みに、この山頂まで來らるゝ御方もありまするが、まことに冬は冷くて夏はあたくかでと、つい夏冬をとりちがへた

れど、老婆はそれとも氣付かず、ひよと愛相に物凄き笑をこぼしつゝ、半紙をとちたる帳面あまた持ち來りて、これへ何でも取出すを見れば、ここに來りし遊人が思ひいづるまゝに書きつらねたる筆のすさび也。なかには詩らしきもの、歌らしきものもあれど、多くは出放題の文句の蚯蚓書きの筆の跡もたどくしく、甚しきを見るに忍びざる形さへ書きたれば、見るもげがらはし、こんなものの中に書くことはいやなりと、戯れ半分に斷りたれど、實際は歌は腰折れ、書は釘折れ、文人達の筆蹟を集めたものでなくて仕合せ也。

金澤八景とは、瀟湘八景に擬して、強ひて設けたる名なれど、沙洲蟹屋の外、入江蒼々として白帆を點し、周匝せる小山の上には、八朶の芙蓉峰半天に立つ。金澤の景、また佳ならずとせず、唯當年の入江の半以上は、田となりたれば、入江を見

下すの景は能見堂よりも、寧ろ入江の彼方なる九覽亭の方が優れり。八景の一なる内川の暮雪は、もと能見堂の方にありしが、かく入江、田となり、能見堂、風致を失ふにつれて、今は九覽亭の彼方に移轉せるも可笑しや。

吹割の瀧

千歳橋の上流、數町に當りて、片品川は全石を底として、その幅一町以上にも及ぶ。水は、その上をうすく蓋ひて流る。その底の全石右岸より懸崖となり、裂け來り、左岸に達せむとして達せず、左岸よりまた懸崖となり、右岸よりの懸崖とわづか五六尺を隔てて延びゆき、右岸に達せむとして達せず。高さは、十數尺なるが、右岸より裂けたる懸崖は、長さ八十間、左岸よりのは百三十間、合せて二百間、隙

間もなく水流れ落ちて瀧となる。

中央數十間の處は、川を横断して、向ひあひて、深淵に落ち込む。嘗て試みに三十尋の繩に石をつけて、さけて見しに、底までは達せざりき」といふ。

一種の水晶瓶が二重になりて、川にかゝれりとても形容すべし。「この瀑は、名は何といふぞ」と問へば、案内せる童子答へて曰く、「吹割の瀧」なり。

紅葉の美

紅葉は、花よりもなほはなやか也。満山みな花とは、文字に使役せらるゝ紀行家の文の上へのみ見るべきことにて、實際は見るを得ざれども、満山みな紅葉とは實際見るを得べき光景也。

たゞその間に松杉のごとき常盤木の點綴するを要す。然らざれば、あまりに華やかにして、且つ單調也。

碓氷の紅葉

碓氷峠へとて、臨時の汽車にて、上野驛を發したるは、午後の十一時。眠ることもなく、覺むるともなく、一夜をすごして、二十六の墜道も、闇にそれとは知らずに通りぬ。満山の紅葉は、夜の錦とかこちけむ。

午前五時、輕井澤驛に下れば、空は白みかけたり。淺間山堂々として人の眉目を壓するに、頓に目覺むる心地す。驛前に、一簇の人家あり、旅館もあり、ここを新輕井澤と稱す。北行すること十餘町にして、舊輕井澤にいたる。

一溪、路を横断するにあひて、下りて顔を洗ひ、口を漱ぐ。曉の冷氣、身に浸む枯木を焚いて暖を取り、一行、火を圍んで朝飯を食ふ。日光は未だ及ばざれども、夜の色全く去りて、秋の曉澄みたり。上流に、燃ゆるが如き楓葉あり。風なきに自から散りて、一溪、錦を流す。快きまゝに、休息すること一時間に餘りぬ。

坂にかゝりて、七八町上れば、茶店あり。輕井澤の赤別荘、すべて脚底に在り。近く淺間の噴煙を仰ぐ。遠く立科の高嶺を望み、更に八ヶ嶽の白頭を望む。これ碓氷峠に於ける信州方面の眺望也。ここにも二十分ばかり休息し、峠にいたりて、熊野祠を石段の下より見上げ、茶亭に就いて、眼を上州方面に放つ。關東平原は、半開の扇となりて開展す。妙義一群の山々、近く脚下にさまざまの畸形を呈す。三つ目入道みたやうな山もあれば、一つ目小僧みたやうな山もあり。けに、山岳の百鬼

夜行とも云ふべき天下無類の奇觀也。

碓氷峠の舊道は、上州方面には、この奇觀を有し、信州方面には、淺間、立科、八ヶ嶽の三高山を併せ見るの壯觀をも有す。關東に峠は多けれども、眺望のすぐれたること、この峠の如きは、絶えてその類あらざるべしと思はる。信州方面の壯觀は、或はその類あるべし。されど、山岳の百鬼夜行は、妙義の特有にして、その山岳の百鬼夜行を残らず見るの奇觀は、碓氷の特有也。

名物の力餅、他の處ならば、辨慶の名を負ふべけれど、ここは碓氷貞光の名を負ひたり。頼光四天王の一なる貞光は、ここに生ひたちたる也。繪葉書ばかりを買ひ休息すること三十分にして去る。路傍に、小祠あり。榜して、『大武士神社、日本武命』と二行にするす。祠名は、ともかくも、日本武尊が日本武命にてはと、かたは

ら痛く思はる。草の山也。

右に紅葉の嶺口を見る。左にも折々紅葉の山を仰ぐ。しばし空俵を負ひたる駄馬に行き逢ふ。その空俵には、炭が入れらるべし。古道方面に紅葉の少きも、元來少かりしに非ず、煙と消えたる也。一山の風致、箱根の大地獄より強羅を経て、木賀に下るあたりと、ほど相似たり。下るに従ひて、眼界ひろさを減じたれども、前には低く峰層重りあり、左右には谷もあれば、山もあり、濃く、うすく、秋の錦を展べて、眺望は、晴れやか也。

碓氷の流域見えそめて、奇巖路に峙ち、瀑布かゝり、清溪脚底を流る。二三の壁道を見て、新道に合し、やがて坂本に來りて、山坂ここに盡きぬ。汽車にも閑却せられたる碓氷東麓の古驛、秋、殊に蕭條たるを見る。

鹽原雜觀

鹽原の地、連山直に水を夾んで、温泉到る處に湧く。その水は清く、量も多く、山は木に蔽はる。その木のよく茂ること、關東に稀に見る所也。

關谷より古町まで三里の間、路は箒川に沿ふ。左右は、直に山也。人は、自然の大屏風の間を行く。秋になれば、兩山みな錦繡となる。鹽釜より鹽の湯を経て、鹿股川を溯る間、殊に幽邃也。所謂深山幽谷の趣は、このあたりに見るべし。古町を過ぐれば、普通一様の山間也。新湯を経て、高原山に上るも、さまで幽邃の趣は無し。

鹽原に瀑布多けれども、みな小也。その中にて、赤川瀑や大也。新湯より高原

山に上る途中、赤川を四五町下りたる處、川身一落して、川水奔飛す。高さ二十丈と稱す。新湯より、一里の程也。見返り瀑、之に次いで大也。鹽原への途中、上より見下すが一風かはりて、趣深し。龍化瀑は、鹽原の華嚴瀑也。されど、大さは十分の一ぐらる也。雄飛瀑は、低けれども、水量は可成り多し。その瀧壺の絶壁の雄偉なること、或は華嚴にまさる。

箬川右岸の一帶の山を、高原山と稱す。新湯より上れば、山上に高原あり、池も二つあり、高原山の名は、これより出でたるにや。二高峰突起す。一を鷄頂山と云ひ、他を西岳山といふ。西岳山、最も高し。海拔一千七百九十三メートル也。即ち五千九百七十七尺也。鷄頂山には、鷄頂神社あり。狭義の高原山は、この鷄頂山のこゝ也。福渡戸より鷄頂山の絶頂まで五里、新湯より二里と稱す。

鹽原には、福渡戸、古町、門前、鹽の湯、畑下戸、新湯、須卷、古湯本、大網、鹽釜の十湯あり。鹽釜には、浴場のみありて、旅館今は無し。大網は梅毒患者の浴する下等の温泉場と定まれり。福渡戸と古町とは、東京式の旅館あり。古町の楓川樓、福渡戸の満壽屋、丸屋、松屋など、これ也。鹽釜には、温泉宿が三軒なれどみな宏大也。廻廊長く連る。温泉は、川に接して湧く。客室より長き廊下を下る。浴室のそとは、直に川にて、對岸は直に山也。幽趣あり。われ、最もこゝの浴場を愛す。古町と門前とは、橋にて相連り、畑下戸、鹽釜、福渡戸も、四五町づゝ隔りて相連る。なほ鹽の湯も、須卷も近く之に接す。かく多く温泉の近く相集れるは、他にその比を見ず。古湯本は、箬川に接して、窮谷の奥にあり。温泉宿唯一軒、湯はぬるすぐるやう也。新湯には、八九軒路を夾んで相連る。噴火の名残は、このあ

たりに存して、硫氣一谷に満つ。荒涼として雅致を見る。

妙雲寺は、平重盛の姨の創立にかゝる。名妓高尾の襦袢と稱するものを藏す。二

代高尾は、鹽原の産なりとぞ。八幡の逆杉は、鹽原唯一の大木也。源三窟は、鹽原

唯一の穴也。

福渡戸の附近、野立石臥し、天狗巖立つあたりは、鹽原にて唯一つ山が骨をあら

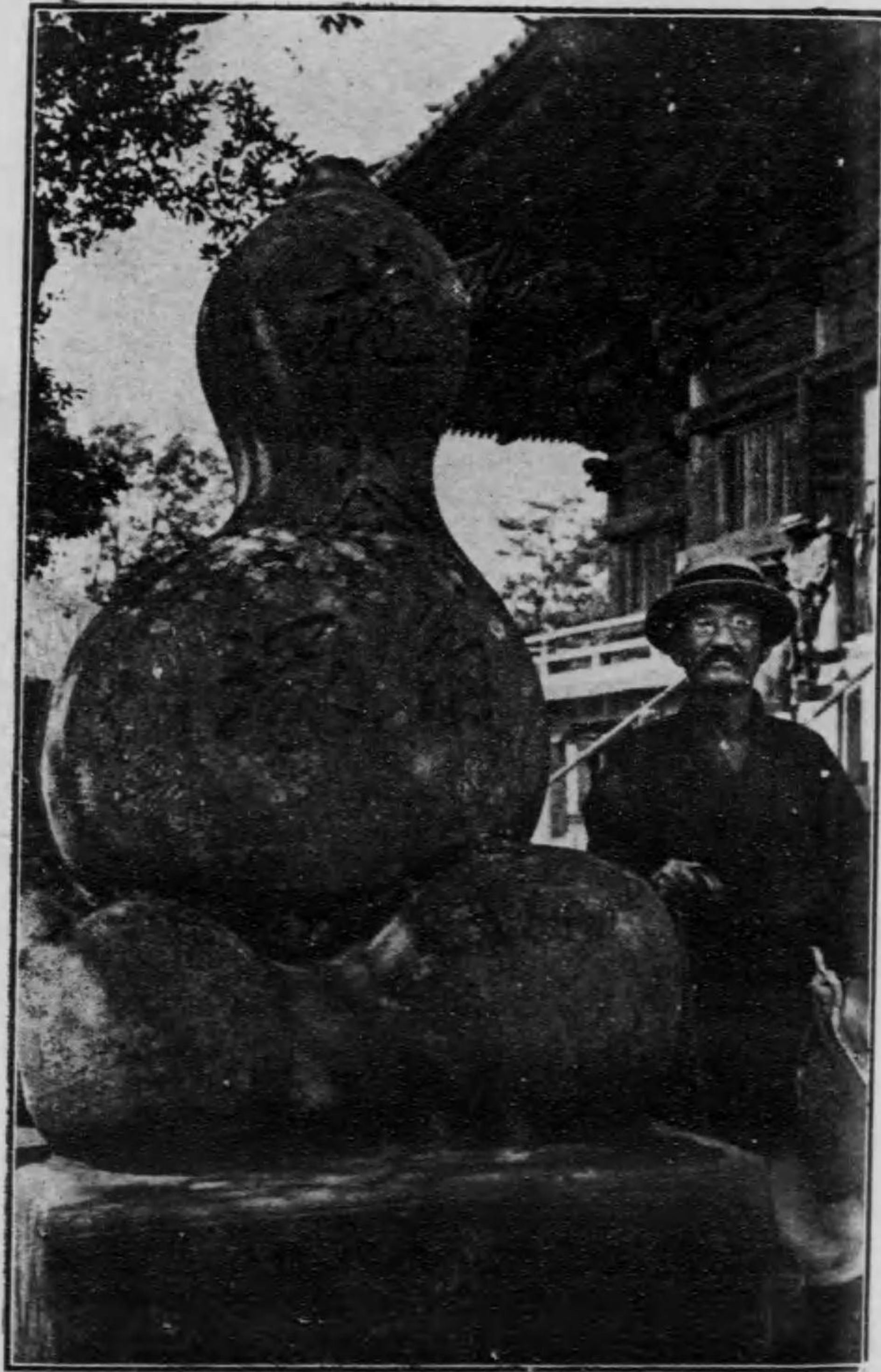
はせる處也。是れより少し上の溪水、兩岸に連れる奇巖にせばめられて躍りながら

流るゝさまは、面白きながめ也。寒凄橋のあたりには、墜道あり、材木石あり。溪

流のさまも面白し。兒ヶ淵、普門淵、いづれも鹽原の名所也。

石碑は、高尾碑と記念碑とあり。高尾碑は、高尾の傳を記す。山本北山の作にし

て、氣も情も生動せざれど、文は見るに足る。氣乗ッがせずして作りしものなるべ



し、紀念碑は、三島通庸のことを記す。文は高崎正風男の作なるが、俗氣誇氣、一篇にあふれて、閑文字も多し。

關谷よりは、徒歩すべし。もしくは人力車に乗るべし。この間を馬車にて通る人は風流を解せざる人也。且つ危険といふことを知らぬ人也。

西那須驛より關谷まで三里の間は、馬車にても危険はなけれど、山水を好むものは、烏ヶ森に立寄れ。西那須驛より僅々十四五町の程也。この丘上、那須野を一目に見わたして、眺望よし。この丘の近くに、雲照寺あり。名僧雲照の埋骨地として豫定せる處也。この附近靜にして、清し。

庚申川の紅葉

庚申山の奇は、銀山平より始まる。小瀧の煙毒も、こゝより奥には及ばず。左右の兩山、骨を露はし、溪流を夾んで、つゝ立つ。否、相闘はむとす。

路は左岸の崖腹に通じて、次第次第に上る。こゝも下は絶壁千仞、上も絶壁千仞なれども路幅はひろく、ふみしむる巖石はかたくして、赤倉山の如き、惡魔的道路にはあらず、所々棧道あり。棧道出来ぬ處は、土橋となりて、空にかゝる。右峰の缺くる處は、更にその奥に、幾多の岩峰のかさなりあへるを見る。

進むに従ひて、黄葉多し。ますく、進めば、黄葉よりも紅葉多し。岩に紅葉を帯びたる峰もあれば、頂までも黄葉紅葉を以て充たされて、恰も一大花束の如きもあり。

一峰おくれれば、一峰迎へ、前を望むも奇にして麗、後を顧みるも怪にして艶、岩

峰の奇、甲州の昇仙峽に似て、更に峻峭也。且つ幽邃也。紅葉の美觀は、劍ヶ峰の比に非ず。渴して溪流を掬すれば、清冽玉の如く、紅葉漂ひ來つて口に入る。

巖頭の紅葉

飛流百尺の絶壁より滴る。水は、ほんの雫也。日光之を射て、虹を生ず。

巖には、岩蔭生ひたり。喬杉數株、瀧と高さを争はむとす。

巖頭の木は、霜に染みて赤し。風なきに、一葉落つ。右へひらり、左へひらり、ひらり／＼と、地に著するまでには、大分手間取る。

また一葉落つ。幾秒かかると、時計をとり出して、巖頭を仰げば、あひにくなものにて、十分あまりも待ちて見たれど、落ちさうにもなし。

時計を納めて去らむとすれば、微風來りて、五六葉同時に落つ。

紅葉と白茅

春の花と秋の紅葉との優劣は、古人よく説ける處なれど、各々趣を異にす。必しも軒輊するを要せず。されど、余の好む所を云へば、余は紅葉の觀の壯快にして雄大なるを取る。

元來、あかき色は俗氣を帯びて、趣味なき場合多けれども、崇巖、沈痛、雄壯高大をあらはすも、亦この色也。而して天にありては、之を高山の日出に求むべく、地にありては、之を深山の紅葉に求むべし。高山もしくは海邊にて、日出を望みたるもの、深山に入りて、紅葉を觀たるものならでは、共にこの美を詠るべからず。

今しばらく地に於ける赤色の偉觀を説かむに、所謂楓樹の百本か千本ある楓の名所にては、未だ之を得べからず、深山の谷あひに至れば、楓と云はず、柞と云はず、常磐木以外の木は、みな紅葉す。満山みな花とは過言なるべけれど、満山みな紅葉とは實際之ある處少からず。淵となり、湍となり、飛瀑となり、雪をちらし、藍を流す一道の清溪をはさみて、峙てる山、高さ數百仞、二重の屏風をたてたるが如きも、時に横にさけて、數十峰參差交錯し、骨をあらはして肉をあらはさず、樹みな霜にあきて、前後左右、行けども、數里の間、天地すべて錦繡也。淡黄より殷朱にいたるまでの色、千種萬様也。苔むせる石段のほとり、老杉數十百章、赤天地の單調を破るも、亦妙也。その杉の幹にまつはれる蔦の殷朱に染みたるも、更に妙也。紅葉に對して、一種別様の美觀を呈するは、白茅の野也。けに薄の穂に出でたる

は、何となく面白き趣味あり。ひともと二もと、石地蔵の側にたちて、風にもだゆるも面白く、清き小流の岸に思案顔に立ちつくすも面白し。

殊に茫々たる大野、満目みな白茅、風にそよぎてもよし。明月を招き出し得て、更に奇也。尾花の中の一歩、紅裙をあらはしてたどりのゆく田舎少女もあるべく、馬の自ら歩むに任せて馬上のんきけに煙草をふかしゆく老人もあるべし。

黄色の美

紅葉の紅、尾花の白に對して、女郎花の黄なるは、秋の色を三分するの概あり。されど、紅葉、尾花の如き大觀なし。同じ色の春の菜の花に比して、遠望はむしろ下れり。近よれば、さすがに菜の花よりも風情あれど、實よりは名が勝ちたるが如

し、姿色の可憐なるは、われ、秋海棠を取り、百合を取る。七草の中にも、女郎花よりは、むしろ萩を取る。萩の花の露おもたけにしなだれたるは、西施のひそめるが如し。女郎花のすらりと立てるは、緞茶袴をつけてはねまはる女學生の如し。

箱根の黄葉

雨かとききて、曉夢さむれば、溪聲也。この日、天氣よし。今宵のやどは、塔の澤也。

碁盤平つきて、下り坂にとりかからむとする處に來りて、忽ち驚喜す。嗚呼、何たる佳景ぞや。底倉、宮の下の瓦鱗、近く脚下に在り。見渡すかぎりの樹林、總て黄葉す。左には、明星の連峰、南に走り、右には、神山巍然として聳え、それにつ

らなれる一帯の連峰、明星の連峰と東西相並んで南に走り、相合せむとして合せず。この二連峰は近くして濃く、その彼方には、なほ遠くして淡き連山いくへにも並び、東西南三面の眺望よく、その上にも眼界の半は、黄葉の美を以て充たさる。ここは箱根山中、最も眺望の面白き處の一也。殊に箱根の黄葉の大観は、ここに過ぎたる處はあらざるべし。

世人、碓氷、日光、鹽原の紅葉の美を説いて、箱根の黄葉の美を説かず。されど箱根は、黄葉の美観を極む。さびあり、澁味あり、禪味あり、俗眼には奇ならざれども、自然の眞趣を解する者は、必ずや紅葉の美よりは、黄葉の美に、多く趣味を有するに至るべし。

黄葉の大観は、箱根山に在り。箱根山の中にも、この木賀より程ちかき碓盤平に在り。日光や碓氷の秋を賞する人にすすむ。請ふ、卿等の眼識を進めて、來つて箱根の黄葉を觀よ。

黄葉の村を見渡しつゝ

明神嶽を下る路、いと急也。足を下すごとに、膝がくくして苦しからざるにあらねど、上るほどの苦みはあらず。

黄葉の村を見渡しつゝ、一呼して下り、身はやがて黄葉の村に入り、早川をわた

り、木賀を過ぎ、底倉に至りて投宿す。疲の半は、靈泉になほりぬ。晩食終へて、一堂に會し、思ひくの隠し藝を演じて、夜の更くるを知らず。

夕陽の黄葉

箱根の主峰たる神山、冠ヶ嶽、早雲ヶ嶽の一群、高く天を貫き、斜日の光、亂雲の間を透かして、數十條の金箭、黄葉の村を射る。所謂夕陽黄葉の大觀をきはめたる上にも、神山一簇の箱根主峰は、之を蘆湖のあたりにて見るよりも、ここにて見る方が遙に趣多し。

箱根連山は、どこから見ても、その容温雅なるが、唯ここより見る神山一群のさまだけは、單調を破りて、勢頗る雄偉也。殊に後に酒匂川の流域と東海とをひかへて、實にこれ箱根山中の一大美觀也。

夕日に映ゆる黄葉

路は山腹を縫うて行く。暮れかゝる月の落つる松釵の聲有るばかり靜かなるに、右に山又山を見下して、心もゆるやかに、夕日にはゆる黄葉の下、湧く白雲に送られて、左に峰一つ攀づれば、渺として眼界いと廣し。

般紅、血を流すが如き夕やけの空を背にして、進みゆくほどに、暮靄、乾坤を封じて、老杉の下の小路くらく、燈を點する頃、山宿に達す。

釣を垂るゝ人

ひねもす、清溪に釣する翁の、家にまつ人もなければにや、日くるよも、なほ枯

木の如く磯に腰かけて、垂るゝ綸のはしに、いつしか一痕の月かゝるよと見るほどに、やがて手應へしければ、ひき上ぐる竿の鬻々たるに、かゝり來れる一尾の香魚の澄澗たるを捉へて、籠に入れて、今日はこれまでなりと、鼻歌たかく歌ひて歸りゆきしあと、溪水舊によりて、空しく月を碎いて流るゝもいとすがし。

月下の村

一里ばかりにて、山坂つきて、鳥居あり。二三の人家もあり。横瀬村宇生川と稱する處也。

「大宮へ何里」と問へば、「二里」といふ。「妻坂峠を越えて、名栗村の宿屋ある處へは」と問へば、「これも二里」といふ。

今宵は大宮へとて、生川を下る。口くれて、一時間ばかりは月下を歩む。詩を吟するに反響するを何かと見れば、近き森也。一村夜静まりて、物音なく、行人もなし。たゞ所々の人家に機杼の聲を聞く。さすがに、秩父絹の産地也。

月下の賤の女

薄に置ける白露を、かしくと讀みしゆふべ、夜に入りて暗きをたよりに、楚音しのばせてたどる行手の黒き影に、さぞやまちわびてと近寄るほどに、雲破れて洩るる月の下さびしけに立てる石地藏の前に、あきれ顔なる賤の女の、さすが手拭に顔のなかばは包みて、しどけなきもその脛もあらはに、血のじみたる跡あるは、人目をしのぶ路の、いばらなどに、きずつけられしにやと哀れ也。

お月さまいくつ

可愛らしき小兒をいだく手も清く細やかにして、力なけなる年若き女の、お月さまいくつ、十三なゝつなど、小聲にうたふにつれて、かたごとに、のよさまくといひつゞけしが、はては疲れて、やはらかき手、母の胸にあてて、ちよ／＼とねだれば、月に白き豊胸露はし、乳房ふくませて、いきういしと覺えずつぶやきたる聲低く、眼もはなたでみとれたる足元に、竹影婆娑として、孤月むなく長風の上にするみてつれなし。

瓜田の月

兩毛の間に遊びて、妙義山を下りしとき、もてる錢悉くつきて、今は食を得るに由なく、飢をしのびて、昨夜は稲田のあぜに眠り、今宵は路ばたの材木の上に眠らむとせしに、蚊多くして眠られず。

よろめく足を踏みしめて、あゆむ行手に、ひろき瓜田あり。

金銀財寶とは異なりて、天地のつくりなせるものを、しばらくかりて、我飢を醫せんにはと、心むら／＼と亂れて、あはや、われ履を瓜田に入れむとせし刹那、我影のあまりに明かなるに、仰げば、隈なき一輪の月魂、天つ御神のにらみたまふかと思はれて、そとろに身の毛よだち、穴あらばとばかりに、身をちよめて、月を拜みてぞ泣きし。

老松

山腹より頂にかけて、ひろく蟠れる老松あり。呼んで蔓延松といふ、北風のために直立するを得ず。直に山骨に接し、十八谷にまたがりて偃蹇俯伏し、時に危巖にあひて、崛起して天に躍るさま、蒼龍の怒つて爪を擧げて攫まむとするが如く、また細枝の長く懸垂に垂下せるさま、猿猴の手を伸ばして澗底の水を掬せむとするに似たり。われ、その枝を踏んで雲表の峻嶽をわたる。恍として蓬萊山上に松が枝を攀づるも、斯くやと疑はる。

箱根雜觀

(一)

箱根山とは、相模國足柄下郡より駿豆二州にかけて、東西に五里、南北四里ばかりの間に磅礴せる群山の總稱也。北は足柄峠より富士山に連り、南は伊豆に走つて天城連山となる。その中にて、神山(四千七百四十九尺)最も高し、冠が嶽、早雲山の二山、之と鼎立す。稍南に離れて駒が嶽(四千四百七十二尺)あり。高さ、神山に亞ぐ。この四山を、箱根の主山となす。幾ど中央に位せり。その北には、金時山(四千三尺)、明神が嶽(三千八百十五尺)、明星が嶽(三千五十九尺)、塔が峰(千八百六十八尺)の連山、鯨背の如く東に向つて走る。南には、二子山(二子山は二あり。都合四峰也。上二子は三千五百五十七尺、下二子は三千五百一十一尺)、鷹の巢山、浅間山、城山、湯坂山の連山遷延として東に走る。この連山は、金時の連山よりは

低し、二連山共に東に走るに従ひて低く、且つ二山の間通り來り、終に湯坂山と塔が峰との間は、僅に一溪を隔つるのみ。温泉は、すべて神山の前後と、その二連山の間とに在り。湯坂連山の南、更にまた一連山あり。鞍掛山（三千三百一尺）、文庫山、聖が嶽より延びて、石橋、石垣の二山に至りて止む。東海道は、この間を上る。而してこの鞍掛の連山と金時の連山とは、神山を回つて相連り、一大圏をなすもと箱根は復成火山にして、舊火口は直徑數里に互りたれど、後その中より、神山二子の連山など隆起して、今は蘆の湖のみが火口の如く見ゆ。山上を横絶せる東海道と溪谷の間とに樹木あるのみにして、すべて童山也。随つて崇高の觀なけれども、山上薄多く、尾花秋風に靡くの景最も喜ぶべし。神山は、箱根の盟主也。されど富士山に比すれば、兒孩の如し。この山の頂上より西方を望めば、富士山近く天上

に巍立す。快絶また壯絶、眞に東海の偉觀也。

(11)

われ、既に山を説けり。次に水を説かむ。箱根の頂上、神山の南に、蘆の湖有り四方に、山を廻らせり。南北二十町、東西一里半、日光の中禪寺湖よりは狭く、且つ勝景も下れども、蘆の湖には、倒富士の奇觀あり。南端の中央に、半島高く突出す。之を塔が島といふ。その上には西洋風の高樓あり。これ即ち離宮なるが、この地、濕氣多ければとて、鳳輦待てども至らず、蔓草徒らに玉階を封す。近年別に宮の下に、宮内省御用邸を造らせて、皇女多くここに暑を避け給ふ。塔が島の南に箱根町あり。北に元箱根あり。その間に、箱根故關の跡あり。このあたりより湖尻まで陸路幾ど二里、湖上舟を通ず、一時間ばかりにして、達すべし。湖の形は幾ど瓢

の如し。湖尻は、瓢の口に當れり。ここより一道の早川迸出し、神山の後を廻りて金時、湯坂二連山の間を貫き、岩に觸れて雪を散らし、咆哮して東下し、小田原の傍に至りて海に入る。その長さ五里。須雲川は、湯坂、石橋の二連山の間を湧き出で、東海道に沿うて下り、湯坂山の東端にて早川に會す。早川は、日光の大谷川、鹽原の箒川に比して、岩石のただすまひ、湍流の奇、遙に下れども、亦箱根山に一種の趣を添ふるに足る。瀑布も少からず、鹽原と相伯仲すべし。鹽原の瀧は、多くは低くして大也。箱根は之に反し、小にして高し。その中にて、宮の下より蘆の湯に赴く途中、右に小瀧谷の温泉を望みて左に折れて、二町ばかり行きたる處に、千條の瀧あり、高さ十丈と稱す。堂が島に調の瀧あり、高さ十丈に餘る。そこより程遠からぬ明星が巖に白絲の瀧かかれり。幅は極めて小なれども、高さは三十丈に餘る。湯本より須雲川に沿うて行けば、湯坂山の半腹に、玉簾の瀧あり。二條に分る。その一は高さ十二丈、他は十五丈、以上の四瀧を稍見るべきものとす。

(三)

箱根は四里四方に躡りたる山なれば、四方より上る路ありて、逍遙するに便宜にして、趣味あること、他に多くその比を見ず。先づ東海道は小田原より來り、湯坂山の東端、湯本に達せむとする處にて、三枚橋を渡りて西に上り、蘆の湖の南端に觸れて箱根の頂を横絶し、三島町に至りて山盡く。箱根八里と云ふもの、即ち是れ也。この長路に石を敷きつめたるは、和宮御降嫁の時の修築に係れりとぞ。小田原より熱海に赴く途中、吉濱より鍛冶屋村を経て、箱根町に達する路あり。門川より湯河原温泉を経る路もあり。熱海よりは、有名なる日金山(二千五百五十五尺)の

絶頂を蹴て、箱根山上に達すべし。富士の裾野より上る路も多し。御殿場よりは金時山の南なる乙女峠を越えて湖尻に出づるを得べし。足柄峠の松田驛にて汽車を下り。關本を経て、有名なる道了權現（最乗寺）を経て、明神が嶽を越えて、宮城野村を出づるも亦箱根に達するを得べけれど、最も趣味あるは、三枚橋にて東海道と別れ、湯本を経て、早川に溯りて、諸温泉に至るの道也。

(四)

箱根七湯とは、宮の下、塔の澤、底倉、湯本、蘆の湯、堂が島、木賀の七箇處なれど、近時は、この以外に温泉場なほ六箇處あり。その中にて小涌谷（小地獄）は宮の下と蘆の湯との間に在り。景色と云ひ、温泉宿の廣大と云ひ、七湯の中以上に位す。小涌谷、蘆の湯との間に、湯の花澤あり。地の高きこと諸湯に冠たり。小涌

谷より大地獄（大涌谷）に赴く途中、早雲山の半腹に、強羅の温泉あり。早雲山の後、大地獄の彼方に姥子の温泉あり。大地獄の谷を北に下りたる處に、大涌谷温泉（仙石上湯）あり。そこより五町ばかり下に仙石温泉（仙石下湯）あり。姥子より十數町隔りたる湖尻に新湯ありたれど、火災に罹りて今は無し。今あるものは、都合十三箇所也。その中にて、姥子、大涌谷、仙石は、宿屋陋小にして、唯農民の來り浴するのみ。地も亦僻也。木賀も前年火災に罹りて、宿屋小也。湯の花澤、強羅も亦小也。諸温泉の性質を一言すれば、鑛泉はもと、單純泉、鹽類泉、炭酸泉、酸性泉、硫黄泉の五種あるが、中に箱根は、炭酸泉のみを除きて、他の四種は悉く備はれり。湯本、堂が島は、單純泉にして、效能最も少し。塔の澤、宮の下、底倉、木賀、姥子は、鹽類泉の弱きものに屬し、小涌谷は酸性泉に屬し、蘆の湯、湯

の花澤などは、硫黄泉に屬す、蘆の湯などを除きては、概して效能少けれども、温泉清潔にして、到る處湯槽より溢れ、唯遊ぶには、太だ愉快也。

國府津にて汽車を下れば、直に電車あり。小田原を経て一時間ばかりにて、湯本に達す。ここは、湯坂山の東麓也。温泉宿は、福住最も大也。今一軒の小川は、遙に下れり。ここより早川の右岸に沿うて五町ばかり上りたる處を、塔の澤となす。温泉宿は、鈴木、玉の湯の二者最も大にして美也。新玉の湯は、家は美ならざれども、浴場の美なるは七湯第一なりと稱せらる。この外に、福住、一の湯の二軒あり都合五軒ありて、一箇處に宿屋の多きこの地を第一とす。路はなほ爪先上りに、早川の右岸を縫うて行く。川身次第に遠く、所々唯水聲を聞いて川身を見ず。凡一里半にして、宮の下に達す。海を抜くこと、千尺餘、早川よりも三百尺高く、眺望や

や開けたり。温泉宿最も壯麗にして、箱根温泉中の宮殿とも謂ふべし。富士屋は洋館にして、西洋人のみを客とす。奈良屋は、和洋二館あり。奈良屋の下に、龍雲館あり。崖に靠りて五層樓を築けり。宮の下の温泉宿は、この三者となす。宮の下の入口より、右に五町ばかり、崖を下れば、四山の底、早川に沿ひて、堂が島の温泉あり。宿屋は二三軒ありて、風色最も幽邃也。宮の下より三町ばかり進めば、蛇骨川の傍に、三軒の温泉宿あり。之を底倉となす。更に十町ばかり行けば、木賀に至る。小き宿屋、二つあり。風色は、堂が島に次いで幽邃也。この道は、木賀を過ぎて右に早川を渡り、明星山下の宮城野村を經、突兀たる金時山を右に見、乙女峠を越えて御殿場に出づ。宮の下、堂が島、底倉、木賀の四者は、幾ど一温泉場の如し。宮の下より左に山路を攀づること十五町にして、小涌谷温泉を得る。ここの酸

性泉は西洋にも稀なりとて、西洋人の來り浴する者多し。宿は二軒、共に大也。三河屋となし、開花亭となす。更に行くこと一里餘にして、辨天山に至る。上に恩人碑あり。前は眺望開け、相模灘遙に天に連る。三浦半島近く青黛を引き、房州の先に横はる。曠目縹緲として、畫けるが如し。この小山の後の凹地を、蘆の湯となす。宿屋は、松坂、龜屋、紀國屋の三軒あり。松坂最も大にして、百餘室を有す。ここより右に八町上れば、湯の花澤を得る。温泉宿はただ一軒、眺望最も開豁也。

(五)

蘆の湯より南にゆくこと、半里餘にして、蘆の湖に出づ。路は、駒が嶽二子二山の間を行く、右に精進が池あり。左に齋が池あり。二子茶屋に至りて、初めて脚底に蘆の湖を下瞰す。湯本より蘆の湖まで、東海道を取れば、二里半にして遠く、宮

の下、蘆の湯を経て行けば、四里ばかり也。箱根町には、宏壯なる宿屋數軒あり。元箱根には、遙に下れる宿屋二三軒あり。共に夏日暑を避くるに適す。唯温泉なきを恨みとすれども、夕陽に扁舟を浮べて倒富士を望み、明月に老杉の影を踏みて故關の跡に逍遙し、水に枕むの樓臺笑つて杯を銜み、権現の祠畔、酔うて長風に嘯かば、山靈躍り、天吳舞はむ。

(六)

宮の下より小涌谷に赴く路にて、右折して二の平を過ぎて、強羅に達す。近年の新開に係り、茅屋一個、早雲山腹に立つ。前は高原にして、その盡くる所、谷あり谷の彼方には、宮城野の人家並び、その上に明神、明星の二山、聳峙す。風光明快にして、閑雅也。強羅より蛇の如き一路、早雲山腹を縫うてゆく。既にして、硫氣

をかく。右は、谷也。路は左に、崖腹に通ず。處々難ぎ落ちて、いと危し。この谷の窮即ち有名なる大地獄也。黄白相交はれる峭崖三面を圍み、前には冠が嶽、天を貫いて峙てり。硫烟幾十條となく脚下より聲なくして上り立つ。さながら火事場の焼跡の如し。杖を以て地を突けば、一尺ばかりぐさぐさと入り込む。普通の案内記に、誤つて脚を失すれば、焦死することありとは、少し大袈裟也。谷の右の山を、大地獄山といふ。この山麓にある仙石上下の湯は、ここより涌く温泉を引けり。谷盡きて、黄白の崖を攀づれば、稍平かなる處を得る。眺望開けたり。之を閻魔臺と稱す。ここは大地獄山の頂なれど、仰けば、冠が嶽なほ天外に高し。西にやや下れば、左に蘆の湖の一隅に望み、前は富士山、面に當りて雲上に聳ゆるを見る。矚目太だ雄偉也。更に十數町下りて、姥子の温泉に達す。また十町ばかり行きて、始め

て湖尻に至る。ここに廣き牧場あり。馬牛點綴す、亦一觀也。ここより舟を僦うて箱根町に赴く路すがら、四面の青山を願望し、松樹逆に生ずる巖石の奇を探るも、亦趣味あるべし。

(七)

われ、既に箱根山水の大觀を説きぬ。青山語らずして高く、溪水潺湲として今古に流る。箱根は古來の勝地、至る處古跡あり。蒼々たる風景に對して靜に古を撫すれば、無量の感慨自から胸に盈つ。後北條氏の霸氣永く銷沈して、小田原城址、潮は寂寞として回る。湯本より數町、東海道右側なる早雲寺已に荒れて、左甚五郎の作と稱する山門も亦朽ちむとす。寺に藏せる寶物、古文書、就いて見るべき價値あり。後北條五世の墓相並びて、青苔永く英雄未死の魂を鎮せり。宗祇法師の遺骸

は、駿州の定輪寺に葬られたれど、ここは終焉の地なりとて、一基の石塔あり。雨淋風打、題字讀むべからず。太閤が小田原征伐の時、初めはこの寺に陣したるが、前、石垣山に移りて、直に小田原城を下俯せり。その陣跡今なほ歴然として存す。石垣山に鄰れる石橋山には、頼朝の昔を偲ぶべし。塔の峰の半腹に、阿彌陀寺あり。塔の澤より上ること、十八町、寺は古りて荒れたれど、由來久しく、寶物多し。むかし、朱舜水、水戸義公に伴はれて、ここに來り、彼の楊貴妃が浴せしといふ驪山に勝れりとて、この山に勝驪山といふ別名を附せりとぞ。この山門の下の平かなる處を、萩の里と稱す。堂が島は、夢想國師の閑居せし處、今なほその跡を偲ぶべし。底倉には、太閤の浴せしといふ所謂太閤石風呂、今は蛇骨川の川身に、ちたれど、なほ見るを得べし。南朝の遺臣、新田義隆（義助の子）がここに劍を瘞せしに、賊

に知られて自及せし跡には、石碑建てり。蘆の湯より箱根町に下る路の右側に、多田満仲の墓と稱する一丈許の石塔あり。左側の二子山下に、二個の五輪塔あり。これ曾我兄弟の墓にして、その側の五輪塔は、虎女の墓なりといふ。二子山より思ひ付きたる洒落なるべし。この墓のさきの巖腹に、多く菩薩の像を刻めり。俗に弘法大師一夜作りの二十五菩薩と稱す。弘法、辨慶、小町など、到る處の古跡に引合に出さる。今に傳はれる古英雄の言行は、この類が多かるべし。英雄を助けし黒幕の俊傑の名は傳はらずして、功は皆大將に歸す。古今同轍也。なほ小涌谷と蘆の湯との界に、笛塚と稱するあり。新羅三郎が時秋に笛の秘曲を傳へし古跡なりと稱す。箱根神社は、有名なる箱根権現のことにして、古の無数の英雄の獻納に係れりと稱する寶物頗る多し。古關の跡、今なほ認むべし。行くも歸るも別れては、知るも知

らぬも逢坂の關ならねども、名にし負ふ東海道のこととて、大名の行列はなばなし
く、箱根八甲は馬でも越すがと、雲助の歌に伴はれて、上下する人々引きも切らず
滿腔の喜を湛へて上りしもの、終天の恨を呑んで下りしもの、今は皆一炊の夢に歸
して、湖上の澄波、萬古芙蓉の影を浮ぶるのみ。

薔薇の花

この花、見ても美なり、香氣非常に高し。

西洋にて、薔薇を愛すること、日本にて櫻を愛するが如きは、今更いふまでも無
し日本にても、之を愛する人少からず。

或薔薇を栽培せる人の言を聞くに、薔薇は、花を咲かせるまでの骨折が面白き也。

花の中に、薔薇ばかり多く蟲のつくもの無し。その薔薇につく蟲の種類は、百の上
に及ぶとのこと也。

雑草は自然にしけり、自然に花咲く、名花になれば、なるほど、多く栽培の勞を要
する也。

冬の情趣

秋老いて、冬の初になれば、小春日和うるはしく、長閑なること春にも劣らず。

鳥の聲々滑かにして、立田川邊に錦流る。

科戸の風はけしく吹きまさるままに、木の葉ちりはてし、満園皆枯木となりて、いとさびし。

かくて、寒さ愈々募り、山川草木悉く白雪の中に埋れて、一年空しくここに終る。

行く水

行く水に舟をまかせてねころびて君が小唄を聞く夕かな

鐵かたぐ影はすすきに消えゆきて小唄の聲ぞ月に残れる
都をば塵の巷と思へども語る友あり得難き書あり

山上の焚火

日は赤々と照りたれど、朝の風寒し。枯木を焚きて、暖を取る。

火の熾にあがるを見るは、心地よきものなるが、山上に火を焚くは、心地よき度を越して痛快也。まして、風寒くして、路伴なきに於てをや。

今や、余は、數尺の火炎を相手にして、人界を六千尺の下に見下す也。

雪の山道

山を下ること三里、長野原町に來れば、雪無し。ここは、白根山の麓とも云ふべき處也。

辨天橋を右に見て、吾妻川の左岸を下る。煙突の如く屹立せる丸山、山を半截したる横壁、例の山骨を露はして、風致凡ならず。

戸倉の墜道のあたり、眼を放てば、前方、金鶏山の山腹に川原湯の層樓つらなり縹緲として仙閣の如し。路は直に懸崖の上に在り。溪流巖にあひて、さまざまの奇態を呈す。この間、風景美也。

冬 の一 日

草津を辭して、中之條に至り、やがて中之條を立ち去らむとすれば、井上富澤二

氏の外、小池徳十郎、丸山昌一の二氏まで加はり、われを送り來りて、一旗亭に上る。

日は照りながら、雪ふる。奥山の雪を風の吹き送るにて、吹越とは云ふ也。
井上氏、余を送るとして、

吹越やびく背負うてゆく後影

『びく』とは、『しば』にて製したるものにて、余が一切の荷物を入れて背中に背負ひたるもの也。

井上氏は、更に歌をつくりて、

山の端に入るさの月ぞ惜しまるゝ今宵ばかりの影にはあらねど

丸山氏は、

もみじ葉を心して流せ冬の川
語るうちに、日沈みぬ。

籠の小鳥

足尾と日光との中間に、細尾峠あり。足尾よりすれば上りが一里、下りが二里、その上り路も、下り路も、左右に溪谷ありて、左右の峯々の眺めおもしろきこと、類まれなる嶺也。然も上りより下りまで、満目すべて紅葉也。
急ぐ旅なれど、餘りのうれしさに、峠の茶屋に小憩す。前に落葉松の林あり。柱にかけられたる籠の小鳥、われを見ては、餌をついばむ。

洞窟の奇

多摩川上流の日原の鐘乳洞をはじめとし、大にして深き洞窟少からず。されど、たゞ奇にして怪なるのみ。二三町も深く入りゆけば、美感よりは、むしろ一種いやな感じを生ず。

たゞ伊豆の彌陀窟、但馬の玄武洞、出雲の加賀浦の潜戸、筑前芥屋の大門などの如きは、奇にして壯也。自然美を愛するものは、一見せざるべからず。

岩石の奇

岩代の林木巖、越後の七釜、土佐の龍串、備中の豪溪、河内の岩船、上野榛名山

の葛籠岩、越前濱阪の泥柱、越中礪波郡の天柱石など、いづれも岩の奇なるもの也。巖が橋の形をなせるもの、羽前の山寺の石橋、三河の河合の石橋、河内の久米の石橋、備後の帝釋の鬼橋などあり。

門をなせるもの、上野の妙義山に多し。山全體が岩にして、奇妙怪異の形を呈出せるは、妙義山最も奇にして怪也。下野の庚申山、甲州の昇仙峽、豊前の耶馬溪、讃岐の小豆島の寒霞溪、就中、耶馬溪は、本溪の外、五支溪を有して、區域最もひろし。

星 明 り

星明りに、岩井堂を見上げ、ふと右方を見れば、榛名の山腹、ひかりかどやく。

『伊香保』かと車夫に問へば、『然り、この頃、電気電燈出来たれば、あのやうに明るくなりたるなり』といふ。

伊香保は、會遊の地也。さきに、吾妻川を溯りし時、榛名の方に向ひて、伊香保やいづこと見たれど、見えざりしが、今はからずも燈火にあらはれたり。再遊の念も起りたれど、夜おそければと諦めて、山麓の遊川に、さびしき一夜を過しぬ。

岩櫃山上の眺望

岩櫃山上は、草津の途上、唯見上げて、巖の奇山也。紅葉の觀も、よし。山上の眺望は壯快也。

少し下の方には、瀧峨山の溪山の奇もあり。瀧峨山は、岩櫃山に附屬すべきもの

にして、岩櫃山は瀧峨山をも合せて、けに、吾妻川沿岸、最も奇觀を呈する處也。瀧峨山の入口より岩櫃の頂上まで、五十町と稱す。山は大ならず、また高からずされど上州の耶馬溪は、この岩櫃山を有するによりて、優に天下の勝地たる也。

冬の日影

雀の聲滑かなる冬の日影暖かに圓窓を射て、火鉢の火も消えかかれり。室、淨うして塵なし。床の間の俗氣なき書幅の下、水仙三つ四つ花を帯びたり。老人二人、靜かに局に對して子を下す聲、時に丁々として響く。

山紫水明

余は、國府臺の上、掛茶屋に腰かけて、夕の景色を眺め入る也。西方、三四里の外に、東京あれど、目立つは、たゞ凌雲閣と幾百の煙突が吐く煙と也。斜日、陰雲の中に入つたが、雲を染むるほどには沈まず。遠き處は、はや暮煙低く横はる。一つに連りし遠林、煙に分れて、幾段にも見ゆ。小利根川、近く前を流る。冬のこととて、水落ち、洲出づ。見るく、川が上流へかけて、ぱつと明らかになりぬ。斜陽が水を射る角度の具合にて、斯く明らかになる也。赤に非ず、黄に非ず、白に非ず。たゞ明らかといふより、外なし。『山紫水明』とは、平生たゞ文字の上知りて、晩方にならば、水があかるくなるならむ位に思ひしが、今はじめて實際見て、その妙趣を知りぬ。『水明』とは、言ひ得て妙なる哉。

何處やらにて、百舌鳴く。きびくして、氣持よき聲也。

兎狩の一日

谷川を幾度となくわたりて、木立盡きたり。

草一面の高原に、ほつく黒點あるは、村人の草を刈る也。歌ふ聲さへも聞ゆ。獵夫は犬をつれて、あちこち歩きたれど、兎の影だにも見えず。もとより兎獵の目を目的としたるに非ず。

明神の頂、近く我等を壓す。草のみの山にて、距離とても十二三町としか見えず。上らずやと、一人が言ひ出せば、誰も異議をいふものなく、草ふみわけて上る。上つて見れば、思つたよりは困難なれど、さまでの險路にもあらず。休む度毎に願ひ

れば、黄葉せる宮城野、脚下に在り。神山や、駒ヶ嶽や、二子山や、呼べば答へむとす。大地獄も見ゆ。立ち昇る一條の噴煙も見ゆ。

頂上に達すれば、酒匂流域、脚下に展開し、大山の連山も見ゆ。小田原のさきには、相模灘渺茫として天に連なる。近くは、金時山突兀として立ち、富士も眸中に收まる。北麓一帯の杉林に、道了權現の賽路、自からあらはる。

明神の一山は見渡す限り薄のみにして、尾花は枯れながらも、なほ残る。山は樹木あるを尊しとすれども、草ばかりの明神岳も亦一種の趣あるを覺ゆ。山の尾花はこれ箱根の一特色也。草の缺けたる處に火を焚き、酒瓶を煖めて對酌す。酒を獵夫に分ち、飯と肴とを犬に分つ。

枯尾花犬もまじりて酒宴かな

冬の夕暮

國府臺を下りて、渡舟に乗る。

舟夫は額のつんだる、正直さうな男也。『どうして、このやうに水が少きぞ』と問へば『いつも今頃は、この通りなり。山がこぼる故、水流れ出です。氷とくる頃には、また水が多くなるなり』といふ。『明朝は、大に霜がおりて、寒うござりますぞ！』と話しかくるに、『何故ぞ』と問へば、『今日のやうに、どんよりして、東から風が吹く時は、明朝は必ず寒きなり』といふ。

さびしき冬の夕暮、客も一人、船頭も一人。蘆荻、洲に根まであらはして、枯れながら立てるに、『故壘蕭條蘆荻秋』の句が場所柄、切に感ぜられぬ。

上流さして、右岸の堤上を歩す。西天、山の如き一簇の雲を除して、他の雲は、みな色を生ず。その山の如き雲も、中部は薄きと見えて、富士の形、黒くあらはれその周囲は赤し。

川上には、赤城山あはく見ゆ。日光山は男體のみ見えて、大真子や、女貌や、雲の中に没す。

山上の冬籠

山上の冬籠、さぞ寒かるべしと存申候。冬は、ちと都に出でられては如何に候哉。

静に書を読み、研究などするには、山上が都合よけれど、をりく都の事物に接

せずんば、世におくれ申すべく候。
僕の理想を申さば、一年を一半して、冬より春へかけては、都に居り、夏より秋へかけては、山に居りたく候。

波久禮の一夜

秩父山をさして行く途中、波久禮に一夜やどりぬ。
夜半、眠られず。衾鐵稜、寒氣身にしむ。窓外に豚小屋あり、夜寒に眠られざるにや、ぐうぐうと鳴くこと頻り也。

戯に芭蕉の『木曾殿』をもぢくりて、
豚どこのと背中合せの夜の長さ



冬の雨

寒き冬の日、うしろしぶきに降る雨を阿彌陀傘にうけて、友とたどふたり、ひねもす東海道をのほりける夕つかた、友の尿せむとするに手凍えてうごかねば、われに洋服のほたんはずしてくれよと云へど、わが手もうごかず、さらばとて路傍の家に入りて暖を取る。

そとも見わたせば、はやみちわたれる闇の中に、ほの白き雨をおくりて、心のままに吹きあるゝ風の音、さながら悪魔のさけぶが如し。

雪の富士

路は、早川のゑぐれる深谿に通ず。然も川身よりは、すつと上に在り。脚下遙に溪聲を聞く。満溪の紅葉は、夜の錦と歎ちけむ。

太平臺にいたる頃、夜全く明けたり。溪をへだてて、遙に宮下の人家を望む。その上には、小塚山あり。

小塚山の左肩に白き一塊、凝りて動かざるは、雲にあらずして富士山也。

天神峠の眺望

雪後の風つよけれど、空はよくはれたり。

丸子山を右に見、二つ嶽を左に見て上る。路三十町ばかりは、けはしからねど、雪あるが爲に、歩みやすからず。人の足跡まよなくて、所々三叉の痕跡あり。荒蕪な

どの歩みにや。

坂路つきて、前には圓錐形の榛名富士あらはれ、左に権鬼たる相馬山あらはる。春になれば、牛羊點綴するなるべし。

一目茫茫たる高原、白雪地をうづめて、未だ枯草を埋めず、摺碓岩を数町の外に見て、奇と稱し、榛名湖の東岸をめぐりて快と呼び、天神峠に上り、前後を眺望して絶景と叫びぬ。

朱華表の傍、立錐の地、さやかなる掛茶屋あれど、人なし。顧みれば、周圍一里ばかりの榛名湖、堅氷結びて一大明鏡を開けり。相馬山や、榛名富士や、烏帽子岳や、鬘櫛山や、硯岳や、掃部岳や、湖をめぐりて、それ／＼秀容を露はす。ふかくは山をうづめぬ雪の所々日光にとけたるは、曉に起きたる女の顔に白粉の消え残

れるが如し。

湖畔鹿角の如き枯木の間に、五六の人家點綴して、一縷の煙の、たち昇るもさびしけ也。

前を見れば、谷ふかくして兩方に山高く聳ゆ。その間、自然の一大扇半ば開かれて、上の方には、富士、淺間をはじめとし、甲信の群山淡く描かれたり。下の方には、武藏、上野の山々濃く描かれたるが中に、怪奇なる妙義山、殊に目だちて見ゆ。

冬の池

前橋へとて、利根川をわたり、左折して、木曾神社にいたる。赤城、榛名、妙義の三山も見ゆ。

赤城の裾野、一寸凹みて、木立しけり、飛泉あり。清き池ありて、魚遊ぶ。

日當りよき芝生に、腰を卸して、池を見入れば、一魚わづかに去つて、また一魚來る。多くは、鯉也。

かくて、魚は新陳代謝すれども、來る魚は絶えず。池中の魚、みな來つて、我に禮せむとするに似たり。

一鳥啼かずして、唯遙に水車の音を聞く。

寒水の家鴨

酒匂川をわたる。川に竹の繩をかけわたして、舟を結びつけ、手にて繩を握みて舟を進むるやうな仕掛にせり。

水、淀みて、可なり深くして、清く澄む。
舟をやるものは、村の少女なるが、紅裙風にひるがへりて、水も亦赤し。
雪よりも白き家鴨、三つ四つ、悠々として浮べり。

冬の月

寒禽の聲絶えて、冬の夜やうく更けゆくまゝに、吹きすさぶ木枯の風、身にしてみても、木々のたゞすまひ怪しく、雲間を縫うて走る片破月。かすかなる光を洩らし、老松時におろちの影を横たへ、穂に出でて招きし尾花の床あれて、人目さへ枯れはてたる古池の側、打寄するさゞなみ苔むす巖を嚙みて、餘沫落葉の上にさゞやき、爪先あがりの小路、霜柱にとざされて、踏むに聲あるも、いとさびし

日本三景

(一)

始めて松島に遊びたるは、明治二十年の夏なりき。後十三年目にて天橋立に遊べり。それより後四年目にて再び松島に遊べり。又それより後十三年目にて嚴島に遊べり。前後三十年かゝりて、日本三景を見物しける也。

松島嚴島天橋立を日本三景と稱するは、何時の世以來の事なるかを知らざるが河原左大臣は松島に擬して園池をつくれり。小式部内侍は「まだふみも見ず天の橋立」の名吟を残せり。後白河法皇も高倉天皇も嚴島に御幸あらせ給へり。松島嚴島天橋立は平安朝の世既に名所として有名なりき。いつの世いかなる人も目新しきも

のを見て喜ぶ。如何なる美景も常に見ては飽かざるを得ず。山に圍まれたる京都の盆地に住める人達には、海が珍らしかりしは相違なし。かくて須磨明石が名所となりぬ。和歌の浦も名所となりぬ。されど須磨明石や和歌の浦にては猶近し。はるく東海道を行きて、富士を仰ぎても、さまで珍しからず。一都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」と咏じけむ、その關よりまだすつと彼方に松島といふ絶景があるぞ。山陽道にゆけば嚴島といふ絶景があるぞ。山陰道にゆけば天橋立といふ絶景があるぞと、西方八方に手を延ばして邊陲に名所を見出したるは、日本國民が自然を愛する性情の發露せると共に、また新を好み、殊に進取發展を喜ぶ氣象の發露せるものたらすんばあらず。なほ今日登山を好むものが、富士登山を平凡なりとして南北の日本アルプスに登山し、それもなほ平凡なりとして朝鮮の金剛山まで出

掛くるが如し。而して當年三景を探ぐることは、今日金剛山を探ぐるよりもすつと困難なりき。風景を味ふには勇氣を要す。「居ながらにして名所を知る」といふ歌人は勇氣なきもの也。われは當年都より遙に隔てる松島嚴島天橋立を三景と定めたる事に、先づ日本國民の勇氣を見る。次に海を愛するの趣味を見る。海はこの三者に限れるに非らざるが、一望唯茫々たる海にては、さばかり面白からず。島あるか白砂青松あるか、海に景物ありて、明媚なる風光を呈する處が、日本國民の氣に入る。三景以外、我國には佳景多し。されど明媚なる風光として、三景はいづれも優秀也。心の明媚なる日本國民はいかで明媚を以て優秀なる三景を稱せざるを得むや今日の旅行を好むものは、三景だけにては甘心すべくもあらざれども、ともかくも一度は見しておくべき處なるべし。

(二)

松島の要領はと云へば、大小數十の島嶼松島灣内に散在す。その海、淺くして清からず、その島、巖より成れるにあらざるなど云ふは、雲煙を知らざる也。雪を知らざる也。月明を知らざる也。松島を賞せむには、舟にて廻らざるべからず。殊に四大觀を窮めざるべからず。四大觀とは、富山、大高森、扇谷、多此山これ也。富山は西北隅に在り。大高森は東北隅に在り。扇谷は西南隅に在り。多聞山は東南隅に在り。いづれも眺望好きが、大高森最も優れたり。松島には瑞巖寺といふ古刹あり。鹽釜も松島の一部也。そこに鹽釜神社といふ古祠あり、「黄金花さく陸奥の山」と咏ぜられたる金華山も松島遊覽の範圍也。

海中の仙山、鹿も棲み猿も棲む。巨巖怒濤と相闘ふの壯觀は、天下有數也。

(三)

天橋立の要領はと云へば、幅一町長さ四十町の砂洲青松を戴きて宮津灣と與謝の海との間を劃す。左右に海を見ながら、松原の中をゆけば、如何にも氣持好し。松原を行きつくして成相山に上れば、音に名高き大江山見ゆ。こゝよりは天橋立を縦一文字に見るべく、樗峠に上れば横一文字に見るべし。

(四)

嚴島の要領はと云へば、周回七里の島山、満山みな樹木、嚴島神社の百四十八間の廻廊、浪に浸され、廻り五間三尺三寸、高さ八間三尺七寸の大鳥居を海中に控へて樹木鬱蒼たる彌山を背景とす。天然に人工加はりて龍宮も斯くやと思はる。廻廊の繪馬に名畫多きこと天下第一なるべし。彌山に上れば眺望好く、舟にて島廻りを

爲せば興更に多し。『安藝の宮島廻れば七里浦は七浦七惠比須』、七浦とは、杉の浦、鷹巢浦、腰細浦、青海苔浦、山白濱、洲屋浦、御床浦これ也。いづれにも祀れる神あり。嚴島神社は市杵島姫、田心姫、湍津姫の三女神を祀る。平清盛安藝守となるに及びて、いたく之を崇敬せり。祠殿も立派になりぬ。藤原氏の氏神には春日神社あり。源氏の氏神には八幡宮あり。平氏には之に比すべき氏神なし。嚴島神社が平氏の氏神のやうになりぬ。後白河法皇や高倉天皇は恐れ多き事ながら、清盛の意を迎へむとて此神社に参詣あらせ給へり。屋島に那須野與一が功名の種となりたる日丸の扇は、この社の祠官が平氏に贈りたるもの也。後徳大寺實定も清盛の機嫌を取らむとて、この社に詣で、その爲めに左大將に進みたりき。豊臣秀吉も征明の軍を率ゐてこの社に詣でたり。我軍勝つならば、表向にならむとて、錢を海水に投じ

たるに、みな表向となりたり。全軍喜び勇めり。されどこは秀吉の計略にて、二つの錢の裏と裏とを付け合せて、どう投けても表の見ゆるやうにしける也。千燈敷といふは、横十間縦二十間、縁幅八尺、四方に欄を設く。これ秀吉が九州より凱旋する際に建てたるもの也。こゝに五重塔あり。處の名を塔の岡といふ。嚴島合戦の時陶晴賢の陣したる處也。

その少し北の要害の鼻は毛利元就の城を築きたる處也。七浦の外なる包の浦は元就の軍の上陸したる處。青海苔浦より十二三町ばかり山に入りたる高安ヶ谷は晴賢の自殺せし處也。

茲に嚴島合戦の顛末の大要を記さむに、元就は大内義隆の屬將にして、晴賢はその大將なりき。然るに晴賢は謀勢を起し、天文二十年八月、俄に兵を以て義隆を攻

む。義隆防ぐこと能はず。法泉寺に立退きたれども、猶も防ぐこと能はず。瀬戸崎に落ち行き、舟に乗りて九州に渡らむとしけるに、波荒れて舟覆らむとす。止むを得ず、戻りて大寧寺に入る。晴賢の軍七重八重に取圍む。今はとて自殺せり。晴賢は大友宗麟の子義長を迎へて主とし、大内氏を嗣がしめ、おのれはその影に隠れて實權を握れり。元就も暫し黙して之に従ひたりき。これ、力微なるに由る。而して機を窺へり。

天文二十三年の春に至り、石見の豪族吉見正頼元就と結び、晴賢に向つて叛旗を擧ぐ。晴賢之を攻む。元就は兵を遣はして正頼を助く。別に晴賢の虚に乗じて兵を動かす。晴賢止むを得ず、兵を引上ぐ。元就の兵は強けれども、國は小也。而して晴賢は國大にして兵多し。智慮深き元就こゝに一計を思付きぬ。弘治元年、諸將を

集めて、城を嚴島に築かむことを圖る。諸將みな其不可をいふ。元就肯んぜずして城を築き、己斐豊後守、新里掃部助に命じて、兵數百を以て之を守らしむ。

既にして聲言して曰はく、城を嚴島に築きたるは、我が一生の失敗なりと、毛利氏の部下合樋打ちて曰く、「けに我主君一生の失敗なり」と。これが元就の策略なりとは知らず、敵の間諜まことと思ひて、之を晴賢に報ず。晴賢も之をまことと思ひて、嚴島を攻撃せむことを議す。弘中隆包之を不可としたれど、聽かず。十月に入りて、兵二萬七千を率ゐて之を攻む。元就七千の兵を率ゐて之に向ふ。衆みな之を危ぶむ。十月二十九日の夕刻、火立といふ處より舟出せむとせしに、暴風雨至る。衆みな『風の定まるを待たむ』と云ひしに、「これ天の我に幸するなり」とて、暴風雨を犯して嚴島に渡り、晴賢の不意を討つ。晴賢の軍大に狼狽し、兵多くして却つ

て働自由ならず、同士討するもの多く、逃げむとして、舟を争ひて溺死するもの
數千人に及べり。晴賢は肥満して歩行自在ならず、從兵に助けられ漸く海岸に出で
たるが、舟なし。進退維れ谷まりて自殺せり。元就、惡にその首を大洞寺に葬れり。
強敵一夜に斃れ、毛利氏之より始めて大也。而して義隆の爲に仇を報じ義名世に
舉れり。嚴島には歴史あるが中にこの義戦さへありて、一層の情趣あるを覺ゆる也。

松と日本人

(一)

日本國民は自然を愛する國民なるが、樹木にありては、最も松を愛す。中等以上
の家には庭あり。庭あれば必ず松あり。神社や佛閣も多くは松を植う。日本三景と

言はるゝ松島、嚴島、天の橋立、いづれも松ありて趣を成せり。須磨にしても明石
にしても、三保の松原にしても、田子の浦にしても、勝地と言はるゝ處は、必ず松
あり。街道の竝木も、多くは松也。盆栽も松多し。正月となれば、家々松を門に立
つ。一休和尚の「門松は冥途の旅の一里塚、芽出度くもあり芽出度くもなし」と詠
みたるは、即ち是れ也。

(二)

二重橋外より皇居を拜するものは、何人も土手の上に枝を交へたる松の縁を難有
く思ふなるべし。去つて馬場先門より和田倉、追手、竹橋、田安、半藏、櫻田諸門
を経て、所謂内濠を一周すれば、濠の此方には裊々たる青柳相竝び、彼方には老松
參差として相重りて、松が皇城か、皇城が松かの觀を呈するを見るなるべし。外

濠の一部は失せたるが、喰違より四谷見附、市ヶ谷見附、牛込見附を経て駿河臺に至るまでの間は、ほゞ昔の儘にて、土手の上には老松鬱蒼として相連りて、帝都に一種の壯觀を添ふ、増上寺の前と横とに、珍らしくも松林あり、東海道に出づれば處々に切残されたる松の竝木を見受く。孤立せる松にては、根岸なる御行の松が東京第一なるべし。大き凡そ三圍、高さ五六丈、小さき不動堂を壓して立ち、梢少し傾きて、枝を垂下す。風姿如何にも堂々たり。目白臺なる細川侯の門前には、鶴松の二名松あり。鶴松は先年枯れて、若木之に代り、龜松は猶存す。少し郊外に出づれば、到る處に喬松を見る。本門寺は一山すべて老松也。西新井の大師には、影向松と稱する老松あり。小岩の不動には、星下松高く立ち、影向松低く數十百坪を蔽ふ。二者相對立して、松の奇觀を極む。

(III)

樹木には、それ〴〵特長あり、霜雪に遭ひても色を變ぜずといふことは、古來松の特長としたるゆにて、忠臣や節婦に譬へ來れり。これ松の特長には相違なきが、この特長は松のみならず、杉も有し、檜も有す。なほ外にこの特長を有する樹木少なからず、松はこの外に、絶えて他の樹木に見ずして唯松のみに見る特長を有す。試に海邊に行きて見よ。巖の上や砂の上に威勢よく發展して、海邊の王者の觀あるは、松の木に非ずや、又試に八千尺以上の高山に登りて見よ、土氣の無き巖石の間に瘦我慢を張つて、山上の王者の觀あるも、亦松に非ずや、多くの樹木は海邊の潮氣に堪ふる能はず。又山上の風雪に堪ふる能はず。松や地上の最も低き濱邊に生ひて、潮氣に屈せず。地上の最も高き山上にも生ひて、風雪に屈せず。樹木にし

てこの二者を兼ねるもの唯松あるのみ。松はこの特長を以て 植物界に雄視す。個人にして松の如くんば、其人必ず出世せむ。其家必ず榮えむ。國民にして松の如くんば、其國必ず富強ならむ。松が斯かる特長を有するは、其根の銳利なるに基づく。多くの植物は、土なくんば生長する能はず。否、肥料を得るに非ずんば生長する能はず。松や巖石に根をおろし、その根の先より出づる液にて巖石を溶して、己れの養分と爲す。土なくとも可也。況しや肥料をや、肥料なくては生長せざる植物は、人間で言へば、お坊さま也。土なくんば生長する能はざる植物は、人間で言へば、ほんくら也。われ松に於て草莽より崛起する英雄豪傑志士仁人の 俤を見る。日本國民は古來進取的にして退歩的ならず、有ゆる國難に打克ちて、金匱無缺の歴史を有す。將來益發展せむとせば、北して風雪と闘はざるべからず。南して炎熱と闘

はざるべからず。日本國民の松を愛するは、嗚呼故ある哉。

(四)

松は建築材ともなれば、電信柱ともなり、帆柱ともなる。種科によりては、船材ともなる。能く焚ゆるを以て、松明は其名の示すが如く、松を以て第一となす。松脂は腫物を醫し蟲齒を療す。その葉を食へば、人をして老いざらしめ、身を軽くし氣を益し、久しく服すれば、穀を絶らても餓えず、渴せずとの事也。松葉仙人として松葉のみを食ひて生活せる一老人、現に東京の王子に棲めり。なほ松には、松茸、松露などいふ副産物もある也。

(五)

古來松を詠じたる詩歌俳句少なからざるが、米人ストージ博士の松を詠じたる英

詩は、能く松の特長を知り、兼ねて能く松と日本人との關係を知れり、松の知己といふべし。

THE PINE.

Notice where the pine tree grows,
On the mountain 'mid the snows,
Or upon the wind swept strand,
Often rooted in the sand,
Teaching those who see to bear
Lives of hardship anywhere.
Evergreen throughout the year,
Always full of life and cheer,
Spite of wind and snow and cold
Never seeming to grow old.

Nature loving Japanese
Strive to imitate these trees.

譯

雪ふかき山の上、あるは風強き磯濱の砂の中に、深く根を下して生ふる松の木を見よ。何處にても生活の苦しみに堪へんとする人々に教訓を與ふ。
一年中常緑にして、常に活氣と愉情とに充ち、風雪と寒氣とを凌ぎて老ゆべくも見えず
自然を愛する日本人はこの樹に學ばんと努む。

海と日本人

(一)

第三回の極東競技大會に於ける水泳は、日本人の獨擅に歸せり。さすがに海國

男兒なる哉。

この大會に一つ遺憾に思はるゝは、競漕の無かりし事也。相手なしとならば、止むを得ざれども、海國たる日本、殊に海邊を競技場に充て、競泳までありしに、競漕の無かりしは海國男兒たるもの、誰か物足らぬ心地せざるを得んや。

世界に國は多けれども、島にして一國を成せるは、唯日本と英國とあるのみ。英國は歐洲の日本也。日本は東亞の英國也。何れも海の國也。海の國の男兒たらむ者は、泳がざるべからず。漕がざるべからず。英國は競漕振へども日本は振はず。英國にはドーバー海峡を横絶せる水泳あれども、日本には未だ朝鮮海峡を横絶して、大陸に泳ぎ渡りたる者あるを聞かざる也。

(11)

日本の東亞大陸に對する位置と英國の歐洲大陸に對する位置とは、ほぼ相似たり我國は萬世一系の天皇を戴きて、未だ曾て外國の侵略を受けざるが、英國はもと羅馬帝國の領となり、次に西羅馬帝國の領となり、アングロサクソン王國となり、イギリス王國となり、丁抹王國の領となり、イングランド王國となり、一時共和國となり、今の英吉利王國となれり。外國に侵略せられたり。王室も一系には非ざれど、他の大陸中の諸國に比すれば、侵略も少なく、王室も長く續けり。これ海の恩恵也。日本は英國よりもなほ一層多く海の恩恵を受けたり。海の國は守るに利あり。而して攻むるに、必ずしも不利ならず。若し日本國民をして大陸にあらしめば、或は世界を統一したりしかも知れざるなり。